
+ プラス探偵事務所

愛田美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

+ プラス探偵事務所

【Nコード】

N3339H

【作者名】

愛田美月

【あらすじ】

***シャッフル企画・（キャラクター原案提供者〓高田高さま）
↓（執筆担当者〓愛田美月）***とある事務所でバイト中の真言。
ある日事務所にとある依頼が舞い込んでくる。個性豊かな同僚とともに動き出す！

+プロローグ

弁護士は二人の若い男性を連れてきた。やけにハンサムな背の高い男と、頼りなさげな感じの青年だ。

遺言発表の場に、なぜこの二人を弁護士が連れて来たのか。この屋敷の大広間に集まった全員が疑問に思っていた。

初老の弁護士は、彼らの疑問に答えるかのように口を開く。

「こちらは、亡くなった彩香さんのご友人と元婚約者です」

弁護士の発言に、場は騒然となった。

弁護士は紹介を終えた二人を席に座らせ、こう言った。

「遺産はすべてこちらの婚約者に渡されます」

弁護士が口を閉ざすと、静寂が辺りを支配し、部屋中の視線が一気に婚約者に向いた。

+ 第一章 占いと探偵

照明が一つ切れている。そのため、部屋は薄暗かった。

大きな観葉植物が隅に置かれたこの部屋は、この事務所の応接室となっている。その応接室には、かなり古ぼけたソファがある。

そのソファに腰かけた人物は、震えていた。

「まさか、本当に、こんなことになるなんて」

身体の震えが伝わったのか、声すらも震えている。もう少し室内が明るければ、その人物が顔色を失くしていることが、よりはっきりと見て取れただろう。

「分かりました。依頼料も振り込まれていましたし、お受けしますよ」

明瞭な女性の声が部屋に響く。クライアントとして正式に受け入れられたその人物は、ゆっくりと顔を上げる。

すると、この事務所の所長である女性が、美しい顔に華やかな笑顔を浮かべた。

「お任せください。必ず、わたくしどもが、願いをかなえて見せますわ」

自信を彷彿とさせる声に、ゆっくりと頷いた依頼人は、よろしく願いますと頭を下げたのだった。

築十年以上は経っていると思われる六階建の雑居ビルを見上げると、背景に映る雲が重く垂れこめているのが分かる。今にも雨が降り出しそうだ。そう思って、真言は顔を正面に向け、雑居ビルのエントランスへと続くドアを押し開けた。

中へ入ると、カビ臭い臭いが鼻につく。湿った空気が肌を撫でた。古い建物独特の空気を身にまとい、真言はいつもだいたい一階に

止まったままになっているエレベーターに乗り込んだ。閉めるボタンを押して、すぐさま五階のボタンを押す。真言が今から向かうアルバイト先が、このビルの五階にあるのだ。

大きな音を立ててエレベーターのドアが閉まり、これまた大きな音を立てて上昇を開始した。

真言が壁に寄り掛かると、振動がより一層大きく体に伝わる。真言の寄り掛かった壁には所々大きな染みが浮いていた。いったい何の染み何だろうというも思うが、深く考えることは避けている。

視線を壁の染みから、背面の壁へと向ける。そこにはどういう理由かは分からないが、鏡が壁の二分の一を覆うように設置されていた。

細くて頼りなげな真言の姿を映す鏡は、手赤でかなり汚れている。一度、拭いた方がいいかな。

そう思いながら、鏡の中の自分と目を合わせた。すると、まるで自分の醜い心まで見えてくるような気がして、真言は情けない表情をつくる鏡の中の自分から目を背けた。

しばらくすると、エレベーターが五階に辿り着く。

閉まる時と同様に、大きな音を立てて動き出した扉が開ききる前に、廊下に出る。

晴れていれば、それなりに明るいはずの廊下は、今はかなり暗い。電気がついていないのだ。誰もつけようとする人間がいなかったのだろう。静まり返った廊下は、まるで廃ビルのような雰囲気があった。

数年前まで、このフロアには真言のアルバイト先の事務所以外に二つの会社が入っていたのだそうだ。真言がまだここでアルバイトをする前の話である。その二つの会社は倒産、もしくは移転してしまったそうだ。

他の階も似たようなもので、今は空きフロアの方が多い。

真言は廊下に出された何が入っているのかもよく分からない、誰が置いたのかすら定かではない段ボール箱を避けて、アルバイト先

である事務所の扉の前に立った。扉の上部には曇りガラスがはめ込まれており、そこに黄ばんだ紙が、変色したセロテープで四隅を張り付けられていた。

黄ばんだ紙には文字が書かれていた。

前半はもう、薄く掠れて読めないが、後半部分は『事務所』という文字がかろうじて判読できる。

いつもの癖でその文字に目を通してから、真言は事務所の扉を開けた。

「おはようございます」

事務所の扉を開いたと同時に、衝立で隠された事務所の中に向かって声をかける。

「おはよう。ちょうど良い時に帰ってきたんじゃない？　今降り出したよ」

柔らかなテノールが真言の耳に届く。耳を澄ませば、確かに雨音が聞こえてくる。

真言は衝立を避けて、室内に目を向けた。

部屋を仕切るように置かれたカウンターと、その奥に置かれた左右の壁を覆う大きな棚。最奥には、入口の方向と対面するようにして置かれた重厚な造りの机がおりてあり、その重厚な机の手前には、部屋の真ん中に寄せ集めるようにして置かれた四つのデスクがあった。

これだけ物があるせいで、それなりに広いはずのフロアは、せつかくの広さを感じさせることができなくなっていた。

カウンターの奥には、先ほど真言に声をかけた人物が、何故か箒を手にもっていた。

「あれ？　通さん一人で……」

すか？　と続けようとしたのだが、真言はカウンターの奥を見渡せる場所まで来て、絶句してしまった。

「何ですか、この有様は」

しばらくして。驚き、半ば呆れたような声が真言の口から洩れた。

真言の目にまず飛び込んできたのは、一つの机の上に大量に開封してあるスナック菓子の袋の山。次いで、その中身が床や他の机にばらまかれている光景。よく見て見れば、お菓子だけではない。ファイルや書類が散乱し、デスクに置かれた電話は受話器が外れて床につくすれすれのところで揺れていた。ペン立ては倒れ、デスクに置かれていた花瓶も倒れ、活けられていた花はその周辺に散乱し、水はデスクを伝って、床に水たまりを作っていた。

「何ですか、この有様は」

もう一度同じセリフを吐いていた。

「あ、ははは。いやー、ごめんねえ真言くん。お腹空いたなーと思つてさ、お菓子の袋開けたんだけど、すぐに飽きちゃってさ、でもまだお腹空いているからと思つて、他のも開けちゃってさ、そうしている内にこんなことに」

先ほど真言が通さんと呼んだ人物が、真言の傍へと寄つてきてそんなことを言つた。通は女性のように整った顔立ちを情けなさそうに崩して微笑んでいる。柔らかな通の笑顔について和みそうになつて、慌てて頭を振つた。

通さんこと、佐野通は真言が勤めるこの事務所の先輩社員である。箒を手に行っているところを見ると、一応掃除をする気はあるらしい。「えっと、お菓子の袋が沢山開いている理由は分かりました。じゃあ、このお菓子がなぜこぼれているのかと、この机の上の惨状はいつたい何ですか」

真言が部屋を見回すと、通も一緒になつて部屋を見回す。そうすると、動きに合わせて、後ろで結んだ通の髪が少し揺れた。今日は赤色のゴムをしている。昨日は確か白だった。

「いやー、清吾が連れてきた猫がね、もう大暴れで」

真言は溜息をつきたいのを堪えて、通を見た。その顔は真言の目線より少し低い位置にある。高校生の真言より、通は身長が低いのだ。真言の身長が百六十五センチであるから、通の身長は推定百六十センチといったところか。

つい通の目を見つめて、真言は通の言葉に嘘がないことを知る。
「おい、通。俺が連れて来たんじゃないよ。猫が勝手について来たんだよ」

不機嫌そうな声が背後から聞こえて振り向けば、大柄な男性が衝立の脇に立っていた。声と同じように不機嫌な顔だ。その端正な顔立ちに似合いの顎髭を蓄えて、四角いメガネをかけている。百八十近くある長身のこの男性は、事務所の正社員である田上清吾だ。

「ああ、分かりました。まーた、清吾さんが猫ちゃんを誑し込んだんですね」

「たらっ……人聞きの悪いことを言うな。真言、あいつに似てきたんじゃないか？ その嫌味なこと」

清吾の言うあいつが、清吾の背後に立っていることに真言は気づいた。

「あーら、清吾くん。あいつって、誰のことかしらあ」

わざとらしく粘っこい口調が清吾の背後に立った女性の口から洩れた。今日はタイトな黒いスーツを身にまとっている。

清吾の表情が固まった。

「お、おー。茉莉。今日もいい天気だな」

「雨よ」

この事務所の所長にして、真言の姉である宇佐見茉莉は、あっさりと真実を口にした。

確かに、先ほどからひっきりなしに、窓の外から雨音が聞こえていた。清吾、大失敗。

真言はにやりと笑う姉と、引きつった表情を見せる清吾に向かって、拝む真似をした。

清吾さん。どうぞ成仏してください。そう思って目を閉じた真言の耳に、清吾の悲鳴が聞こえた。

目を開けてみると、清吾の頬をこれでもかと引っ張っている姉の嬉々とした姿が映った。

隣では、通が無情にも声を出して笑っている。

「まったく、余計な時間を費やしたわ。さ、みんな仕事よ」

「どっちの？」

通が茉莉に尋ねると、茉莉は不適な笑みを顔に乗せた。

「+プラス探偵事務所の方」

そう、それが事務所の名前。プラスの前に付く+の記号含めて正式名称だ。

「どんな依頼？」

興味をそそられて、真言が尋ねると、茉莉は真言に目を合わせ、鮮やかに微笑んだ。

「それは、まだ分からないわ。依頼が来るのはこれからよ」

「なんだそりゃ。依頼が来てねえなら、仕事のしょうがねえじゃねーかよ」

大きな手で、頭を掻きながら清吾が呆れた声をだした。

そんな清吾に、茉莉は冷たい視線を送る。

「うるさいわね。私は、占い師よ。未来が見えるの。依頼が来る前にやれることをやらないと」

「あー、さいですか」

面倒くさそうに言われた答えに、茉莉は蹴りをくらわせた。痛がる清吾をよそに、通と真言に向かってにつこりと笑う。その笑顔が少し怖い。

さあ、さっさと仕事に戻るわよ。と、言って歩き出した茉莉を、真言は止めなければいけなかった。

事務所の惨状を見た茉莉は、外より早く、事務所に雷を落としたのだった。

+ 第二章 黒いうさぎ

小さい頃、真言は人の目をじっと見つめる癖があった。それは、彼のある能力に起因するものであったのだが、周りの大人は誰も信じてはくれなかった。

理由を言おうものなら、嘘つき呼ばわりされるか、気味悪がられることが大半で、大きくなるにつれて、彼は自分のこの力のことを口にするとはなくなつた。

土曜日は学校が休みだ。真言は事務所の所内で、先ほどまで計算していた書類のチェックを終えた。

真言のこの事務所での主な仕事は、経理の手伝いである。

経理担当の所員が、先日から別の仕事で席をはずしているため、真言がその仕事を一手に引き受ける羽目になっていた。

座ったまま伸びをすると、固まった肩が少しはほぐれるような気がする。

ふと顔を上げて見ると、前の席に座る清吾と目が合った。

清吾は、パソコンを前になぜか、雑誌を開いていた。さっきまで、パソコンではなく雑誌を読んでいたようだ。

「清吾さん。ちゃんと仕事してくださいよ」

これまでも何度となく、同じセリフを口に出している。今日もすでに三回目だ。

「真言ー。おまえ他に言うことはないのか」

「ないです」

即答してやった。

清吾は緑色の四角いメガネを中指で押し上げて、ふんつと鼻を鳴

らす。

「真言は真面目クンだもんなー」

どこか、揶揄する響きのある声に、真言は顔を顰めた。そんな真言の前に、茶色い液体の入ったペットボトルが差し出される。

「まこっちゃん、はい、紅茶」

「あ、ありがとうございます」

事務所に備え付けの小さな冷蔵庫に買い置きしていた、五百ミリペットボトルの紅茶だった。素直に受け取ったものの、真言は通の呼び方に違和感を覚える。

「通さん、今日はまこっちゃんですか？」

通は女性のように柔らかく整った顔に笑みを浮かべる。

「うん。真言君はもう飽きた」

「飽きたって……」

真言は呆れた。通はしょっちゅう人の呼び名を変えるのだ。油断していると、たまに自分が呼ばれていることに気づかなかつたりする。

「清吾には、これ」

清吾にはいつもと変わらない呼び名で呼びかけて、牛乳パックを置いた。

清吾は礼を言ってそれを受け取り、そのままパックに口をつけようとした。

「あ、でも、それ賞味期限切れてますよ。後で捨てようと思って……」

……

制止しようとしたが、清吾はそのままパックに口をつけてしまう。

「せ、清吾さん」

「大丈夫だって、まこっちゃん。清吾は鉄の胃袋だから」

「でも、鉄の胃袋って言っても限界はあると思うんですよ。あれ、一週間以上賞味期限切れてるんですけど」

今朝確認したから確実だ。パックを開けて、少しつんとした臭いも嗅いでいる。さっさと捨てておけばよかった。

「大丈夫だつつつてんだろう。お前も大概心配症だな。俺はちょっとくらい腐っても平気なんだよ」

平気だからと言って、腐ったものを口にしていいわけがないと思うのだが。

本人が良いというなら、もう何も言わない。

真言が、諦めに似た気分で溜息をついたとき、不意に電話が鳴った。

けたたましい呼び出し音に、三人で顔を見合わせる。

清吾が真言に向かって顎をしゃくった。お前が出るとのことだろう。通に目をやると、どうぞという風に手を差し出された。

真言は一度咳払いして、受話器を持ち上げる。

「はい、黒姫占い事務所です」

真言は、+プラス探偵事務所ではなく、もう一つの事務所名を口にした。

この事務所の所長、つまり真言の姉が黒姫という名で占い師をやっており、駅前のビルの一角で、占いの館を経営しているのである。もしもし？」

電話の相手が無言だったので、真言は訝しんで声を上げた。

『あの……』

「はい？」

女性の声だ。どこか緊張気味の小さな声が真言の耳に届く。

『黒い兎を探しているんです』

「こちらはペットシヨップではありませんよ」

電話の相手の緊張が伝わったのだろうか。真言の声にまで緊張が現れた。

清吾が席を立って、隣室のドアの方へと足を向けるのを眼の端に捉える。

『でも、そちらに迷い込んだはずですよ』

ひかない女性の声に、真言は知らず知らず、受話器を握る手に力を込めた。

「黒い兎を見つけてどうするんですか？」

『た……』

「た？」

『食べるんです。天ぷらにして』

「天ぷらですか？ から揚げの方がおいしそうですよ」

何言ってるんだろうと、真言は思いながら相手の発言を待った。

「いえ、天ぷらがいいんです」

真言はその言葉を聞いて、隣に立っていた通に頷いて見せた。

ドアの開く音が耳に届き、真言がそちらに顔を向けると、清吾とともに、茉莉がドアから出てくる姿を目に捉える。

「それでは、しばらくお待ちください」

真言はそう言って、保留ボタンを押し、茉莉を見た。

「姉さん、かかった。予想通り、依頼だよ」

「プラスの方ね」

そう言つと、所長のデスクに歩み寄つた茉莉は、受話器を持ち上げた。

「お電話変わりました。+プラス探偵事務所、所長の宇佐見です」

先ほどの、電話での会話は、暗号だった。

+プラス探偵事務所への依頼をしたい人間に、こちらの指定した暗号を言ってもらふのだ。一言でも間違っていれば、真言は電話を切っていた。

暗号は、清吾の作った黒姫占いのホームページ経由で知ることができる。いろいろと面倒臭い手順を踏まなければならないが、本当に助けが必要な追い詰められた人間なら、これくらいの暗号は覚えられて当然というのが、茉莉の持論だった。

「本当に、かかってきたな」

通が感心するように、呟いた。

「そりゃ、姉さんだもん。姉さんは未来が見えるから」

真言が言つと、清吾が眉を顰めた。

「おまえ、茉莉が言つたこと本気にしてんのか」

清吾も、三日ほど前に茉莉が言った、近々依頼が来るといった言葉を思い浮かべていたようだ。

清吾の呆れたような声音に、真言も眉根を寄せて清吾を見る。

「信じてるよ。っていうか事実だもん。嫌だな、清吾さん。夢がないんだから。僕こんな大人になりたくないなあ」

わざと大げさに首を横に振ってみせる。清吾が眉間に皺を寄せた。「ふんっ。なんだ、この、シスコン」

「ウドの太木」

真言と清吾は無言で睨み合う。まだ茉莉が電話を終えていないので、大声で言い争うことは互いに避けている。

「うーん。何でだろ。真言くんの方が賢く見えるよね」

真言の隣で睨み合っている二人を観察していた通は、そんな風に感想を述べた。呟くように言ったので、所員の誰の耳にも入らなかった。

+ 第三章 依頼人

辺りは暗い。

葉擦れの音が響く、森の中。

別荘地としても有名なこの場所にある湖で、大きな水音が鳴ったのは、深夜三時過ぎのことであつた。

街頭もなく、月明かりだけが頼りのこの時間帯に静かな声が響く。「馬鹿だね。言う通りに、泳ぎの練習していれば、こんなところで溺れずに済んだのに」

どこか嘲笑するようなその響き。だが、言われた相手に届いていないのか。

そう言われた相手は、湖の中にいた。

浮き沈みする頭。時折水面に現れる顔は必至で、棧橋の上から溺れる己を眺めている人物に、助けを求めるように腕を伸ばす。

「た……すけ……」

顔が水面に上がった時に漏れた声。

棧橋に立った人物は、ゆっくりとしゃがみ込んだ。そうすると、水面に映った月明かりが反射してその人物の顔を淡く、だが、はっきりと照らし出す。

その人物は笑った。とても、酷薄に。

「助けてなんて言われる日がくるとはね。こっちが助けてつて頼んだときは、相手にもしてくれなかったのに」

どれくらい時間がたったのだろうか。水音が、だんだんと弱くなってくる。

命が、尽きようとしている。

「これは罰だよ」

その言葉が合図のように、水中にいる人間の動きが止まった。

棧橋に立った人物は、ゆっくりと立ち上がり、湖に背を向け歩き

出した。

「さよなら」

その、一言を残して。

梅雨に入っすぐだった。姉の彩香^{さやか}が水死体となって発見されたのは。

一週間の予定で、静養にと別荘に向かった姉の彩香。十日たっても帰ってこない姉を心配して、姉を探すように頼んだのは自分だった。

姉は、湖に浮いていたという。

警察は事故だと言った。

かなり泥酔して、足を滑られて落ちたのだらうと。

姉は泳げなかった。小さい頃に海で溺れかけたのがトラウマになっていたのだ。そんな姉が、酔っていたからといって、水場へ近づくだろうか。

雨が、頬に当たった。

低く垂れこめた雲が、とうとう泣きだしたのだと思った。

そう言えば、姉の遺体が茶毘^{たひ}に付された日も雨だった。

そして、今日も雨。

岸谷玲香は、寂れた雑居ビルを見上げた。

この五階に、用事があるのだ。この五階にある探偵事務所に。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

女性は、緊張した表情を少し緩めて真言を見上げた。

岸谷玲香と名乗ったこの女性は、派手なといっても差し障りはな

いだろう美人だった。身体も細くしなやかな肢体だ。

五分袖の黒いワンピースがとてもよく似合っていた。

彼女の綺麗に化粧を施された顔を、真言は思わず見つめていた。

「あの、何か？」

じつと見つめていたのを不審に思ったのだろうか。それとも、不躰な視線に、嫌悪感を抱いたのだろうか。岸谷玲香は戸惑った視線を真言に向けた。遠慮がちなその声に、真言は我に返ったように、二度瞬きをして俯いた。

「す、すみません。失礼します」

そう言つて、慌てて踵を返し小走りに扉へ向かう。

「それでは、お話を伺いましょうか」

茉莉の声を背後に、真言は応接室を辞した。

持っていた盆を胸の前で抱え、閉じた扉に背をつけた。

目を瞑る。

大きく息を吐出した。嫌な感じに騒ぐ胸を持て余す。久し振りの感覚に、動転した。先ほど見た映像が閉じた瞼の裏に、フラッシュバックするように映し出された。

見たくもないものを見るのはもう、嫌なのに。

もう一度大きく息を吐きだして、真言は事務所を見回した。デスクにいつも座っているはずの所員が一人もいない。

真言は応接室の隣にある、半分物置と化している仮眠室へと足を向けた。

ドアを開けると、やはり二人はいた。

おざなりに置かれた雑多な物に囲まれるように、置かれたテーブルとソファ。そのソファに清吾と通が座っていたのだ。

小さなテーブルの上には、これまた小さなモニターが一つ置かれている。

「何、してるんですか？」

狭い部屋で、男二人が肩寄せ合って小さなモニターを見つめている光景が異様に見えた。

通は、真言の声に反応して顔を上げた。真言を目で捉えると、こ
っちへおいでというように手招きする。通は清吾の肩を押しやり、
すこし座る位置を奥にずらしながら口を開く。

「マコッピーこっちこっち。ドア閉めて横おいで。今、隣の部屋盗
み見てるから」

マコッピー？

盗み見ているという言葉より、こちらの方が気になった。

真言は言われたとおりにドアを閉めてから口を開く。

「あの、通さん。マコッピーって僕のことですか」

「そう。嫌？」

「嫌です。それならまこっちゃんの方がマシです」

通はうーんと唸った。

「じゃあ、まこっちゃんにしくよ。今日は」

今日は？　と思っただ、口に出すのはやめた。どうせ何を言っ
ても無駄だ。

「おい。お前ら、聞こえねえだろ」

清吾がしつと人差し指を立てて唇にあてる。そんな子どもっぽ
いしぐさが、洗練されて見えるのは、清吾が男前だからだろう。

清吾の言葉を無視するかのように、通が声を上げた。

「あれ？　まこっちゃん顔色悪くない？　気分でも悪いの？」

「何だよ。変なモノでも食ったか？」

真言は、ぶっくらぼくに言われた清吾の言葉に首を横に振って
みせる。

「食べないよ。清吾さんじゃあるまいし。……っというか平気だ
から、何でもない」

つい、目を伏せながら言うと、隣に座る通が小さく溜息をついた
音が聞こえた。

「なら、いいけど」

その声に顔を上げると、二人に視線を向けていた清吾が、メガネ
の奥の瞳をモニターに移した。そして、モニターを見つめたまま口

を開く。

「結構美人だな、今度の依頼人」

どことなく嬉しそうな声に聞こえる。

「そうだね。少し、音量上げようか」

清吾の言葉を軽くあしらって、通がボリュームを上げる。囁くように聞こえていた音声が大きくなった。

「隣に聞こえないかな」

「大丈夫だこれくらい」

清吾が面倒くさそうに真言に言う。

「それより、見とけ。お前も」

珍しく真面目だと思い、清吾を見た。

そして、気づく。

清吾の手にはなぜか缶ビールが握られていた。今、仕事なのに。真言は溜息をつきなくなった。せつかく真面目だと思ったのにこれだ。

『では、まとめさせていただくと、亡くなったお姉さまの婚約者だと名乗る男性を調べてほしいということですね？』

茉莉の声が耳に入り、真言はモニターに視線を移した。岸谷玲香はうつむいていた顔を上げた。モニターに映る玲香の瞳の色の激しさに、真言は息を飲んだ。

『姉は、あの男に殺されたんです。遺産の全てをあの男になんて。家族の誰も知らなかったのに』

『事故死ではないと思われるわけですね』

確認を取る茉莉に、岸谷玲香は頷いた。

『ええ。あの男が殺したに決まってるんです』

岸谷玲香は微笑んだ。冷笑という言葉が良く似合う微笑みだった。姉を殺したあの男に復讐したいんです』

真言は背筋が凍るような寒気を覚えた。依頼人は、まるで挑むような口調だった。

殺人を立証するような証拠が欲しいのではなく、彼女は復讐を望

んでいる。

姉が何か言っているが、真言の耳には意味を伴って入ってこなかった。

「怖い……」

真言は無意識に口走っていた。

いつの間にか握りしめていた拳を、誰かが軽く叩く。

隣を見ると、通がゆっくりと微笑んだ。柔らかな笑顔だ。

「大丈夫だよ、真言くん」

優しい通の声に、緊張していた真言の心が少し軽くなる。通の横から、こちらに身を乗り出し、清吾が真言の頭を小突いた。

「痛っ」

「弱虫だな。お前」

清吾がにやにやと笑いながら真言に言った。つい、清吾の目を見つめる。真言は清吾の瞳に心配の色が出ていることに気づき、むくれて見せるしかなかった。

+ 第四章 ターゲット

翌日の日曜日は、久し振りに晴れていた。真夏のように暑い梅雨の晴れ間だ。

事務所内では、茉莉が所員に向け、昨日の依頼内容と、これからの行動についての話をしていた。

その途中。

「絶対にヤダ！」

通が諦め悪く、茉莉にたてついた。茉莉は立ち上がると、女王様よろしく腰に手をあてて、言い放つ。

「ダメっ。我儘は許さないわ。今回の計画にはどうしても、あなたが女装しないとダメなの。婚約者の男に近づく女の役、やってもらうからね」

「だから、どうして僕なのさ。茉莉ちゃんがやればいいだろ」

この事務所唯一の女性なんだから。と、通は珍しく茉莉に言い返す。

茉莉はそんな通を見下ろすように眼を細めた。

「何言ってるの。私は所長よ。そして、占い師。そうそう自由な時間なんてないの。それに、頭は手足に命令するのが仕事であって、手足の代わりに物掴んだり歩いたりしないの。お分かり？」

「でも」

「でもない！ いい？ 私が頭、あんたは足。オッケー？」

「うー」

通は乱暴に頭を掻いた。そのせいでくくっていた髪が大きく乱れる。

「通、いい加減あきらめろ。毎度のことじゃないか」

「嫌なもんは嫌なんだ。それなら、清吾がやれよ。何で好き好んで女装なんてしなきゃなんないんだよ」

八当たりのように、清吾に絡んだ通に向かって、清吾は肩をすくめて見せる。

「おいおい、俺に女装しろっていうのか？ この体で？ 百八十以上あるんだぜ、俺」

しかも顎髭生えてるし。通さんそれ、絶対無理がある。と、真言は思う。

「止めて頂戴。ムサイ」

茉莉は、清吾が女装したところを想像したのか、心底嫌そうに切り捨てた。

「な、なら、真言くんは？」

お鉢を向けられ、真言はぶんぶんと顔と手を横に振ってみせる。

茉莉にじつと見つめられた。視線が痛い。

「む、無理だよ。僕はプラスの方でまともにお手伝いするの初めてなんだよ。演技なんてできないし、失敗するのが落ちだよ」

情けないが、本当のことだ。茉莉にっこりと笑顔を向けておく。茉莉がふっと息を吐いたあと、通に強い視線を向ける。

「つべこべ言っでないで、さ、さっそく服合わせしましょう」

茉莉は嬉々として、通の首に腕を回した。弟である真言には分かる。絶対に今茉莉は楽しんでいる。

コツコツと小気味いいハイヒールの音を響かせて、茉莉は通を引きずるように事務所の奥の部屋へ消えて行く。

「い、嫌だー」

通が助けを求める視線を真言たちに投げかけてくる。

真言は通に向かってそつと両手を合わせた。

ごめん。通さん。僕は自分の身が可愛いです。

清吾の方をちらつとみると、清吾も通たちから視線を逸らしていた。

しかも、あろうことか煙草を取り出したかと思うと、ライターで火をつけたのだ。

「ちよ、清吾さん。仕事中に煙草はやめてくださいって前にも言っ

たじゃないですか」

茉莉が煙草嫌いなので、事務所は禁煙になっている。

「ちょーつとくらい、いいじゃねーか。茉莉はしばらく出てこねえしよ。真言、おまえ小姑みたいだな」

清吾はガハハと笑いながらスパspaと煙草を吸っている。真言の言うことを聞こうとは、ちっとも思っていないのだろう。

「小姑みたいにさせてるの、清吾さんだと思うんですけど」

「お前は真面目すぎんだよ」

絶対そんなことないと思う。僕は普通だ。

真言は、清吾に意見するのを諦めて、事務所の窓を開けるために席を立った。

クーラーのきいた涼しい車を降りて、真言は茉莉から見張るように指示されたマンションを見上げた。車内との温度差に一気に汗が出てくる。そんな真言の横に、運転席から降りてきた清吾が並ぶ。

「これ、顔写真だから」

横から差し出された写真を手にとる。その写真に目を落としてすぐに、真言は写真を返した。

「必要ないです。覚えてますから」

「うーわ。可愛くねー」

清吾は語尾を上げてそう言ったあと、羽織った柄シャツの胸ポケットに写真を入れた。

わざわざ置いてきた写真を持って来る方がおかしいのだ。そう思っていると、隣で清吾が煙草をふかし始めた。煙がこちらに流れてくる。

「もう、また。さっきも吸ったのに、また煙草ですか」

「いちいちうるせーな。お前は風紀委員か」

「え？ 僕は美化委員ですよ」

真面目に返したら、変な顔をされた。その眼に映るものを見たくなくて、真言は視線をマンションへ戻した。

このマンションには、今回のターゲットが住んでいる。どこにでもあるような茶色い外観のマンション。オートロックではないので、出入りは自由にできるだろう。

「今回のターゲットはかなり自意識過剰らしい。家族にも周囲の人間にも、金回りが良い風を装っている。このマンションに住んでることを周りの誰にも言っていないらしいな」

清吾が明後日の方向を向いて煙を吐き出してからそう言った。幾分声を落としているのは、周りに気を使ったからだだろう。まあ、平日の昼間の住宅街とあってか、今のところ、この路地に人通りはないのだが。

「えっと、水商売をやってて、クラブを経営してたけど、上手いかなくて、自己破産一步手前、なんですよね？」

そう言って清吾を見ると、清吾は端正な顔に似合う笑みを浮かべた。どこかからかうような雰囲気だ。

「おー、よっく憶えてんじゃん。さっすが真面目クン」

「茶化さないでくださいよ、って、何猫と遊んでんですか」

棘のある口調になった。いつの間にか清吾はしゃがんで、子猫の顎の下をくすぐっていた。一体いつの間に猫が近寄って来たのだろう。清吾は猫と言わず、動物によくモテた。好かれやすい体質とは本人の言だ。

「相変わらず、モテモテですね」

「羨ましいだろ」

なんかムカつく。そう、思ったが、出すのは表情だけにしておいた。変わりに別のことを口にする。

「それより、ちゃんと見張つといてくださいよ。何の為に来たのか分からないじゃないですか」

「あー、そんなテキトーでいいよ。テキトーで」

猫とじゃれあいながら、片手を真言に向けてひらひらと振る。

真言の眉間に深い皺がよった。
本当にこの人、大丈夫だろうか。と、一抹の不安が頭をよぎった。

+ 第五章 見張り損？

昼の三時を過ぎた。場所を幾度か移動しながら、マンションを見張っていたが、一向にターゲットが出てくる気配はない。

ふいに、真言の携帯電話に着信があった。

尻が震えて、慌てて手にした携帯電話を耳に当てる。

「は、はい」

『あー、真言？ バカに言っといてくれる？ ちゃんとケータイの電源入れとけて』

姉の茉莉の声だった。真言は言われたとおりの言葉を清吾に伝える。

やべっなどと言って携帯電話を取り出す清吾を視界から外し、真言は口を開いた。

「言っといたよ」

『ありがとう。それより、今日はもうソコはいいから、通を迎に行つてちょうだい。約束をキャンセルして、ターゲットがそっちに行つてるらしいから』

「え？」

見張り損だったか。ターゲットはとっくにマンションを出た後だったようだ。

茉莉に分かったと告げて通話を終わると、清吾を急かして車に乗り込んだ。

「ターゲット、通さんのところだそうです」

「ふーん。恐ろしいねえ」

真言が清吾の言葉に肩を竦めて見せたのが合図のように、車は発進した。

通の付けている発信機のおかげで、位置は大体把握できる。ほどなくして、通を見つけることができた。

駅が近くにある繁華街。人通りの多い歩道に横付けて、停車した車の中から通の姿を眼で追う。

歩道を歩く通の横には、やけに姿勢の良い歩き方をする男性がいた。

まるでモデルみたいだという印象を持つ。

「なーんか、化けましたよね」

「ああ？ 通の女装か？ あいつは女装したら女にしか見えんなら」

いや、女装のことじゃないんだけど。と、思ったが、真言は口に出さなかった。

「それにしても、通さん。あんなに女装渋ってたのに、着替えたら違和感なく女性ですよ。口調まで変わっちゃって」

真言が感想を漏らす。

そう、真言の目に映る通は、今女性の格好をしている。普段の通は、女顔だが、普通にしていれば、女性と間違えられることはない。むしろアイドルばりのマスクのおかげで女性にはいつもモテている。羨ましい限りだ。

今日の通はいつも後ろでくくった髪をおろし、白いシャツに水色のスカートをはいている。清楚な雰囲気だ。

とてもよく似合っている。だが、茉莉に強要されなければ、今の格好はしていないだろう。

「隣の男が、亡くなった岸谷彩香の元婚約者か……」

「あ、そうでした」

真言は頭の中で、元婚約者の履歴を思い浮かべた。

その婚約者と、通は楽しげに会話をしているのだ。

その二人からなんとなく視線を外したとき、真言は見知った人物の姿を見つけた。

「あつ、岸谷玲香さん」

つい声を上げると、清吾がその声に反応した。

「おつ、ホントホント。いるいる」

二人の視線の先には、通と婚約者の後をつけるように歩く岸谷玲香の姿が見える。先日事務所に来た時のような、洒落た格好ではなく、アウトレット物と一目で分かるラフな格好だ。

清吾はゆっくりと車を動かした。

玲香の近くに車を横付けし、清吾は車の窓を下ろした。

驚く真言をよそに、清吾は窓から身を乗り出す。

「どーもー。岸谷さん。こんなところで何なさってるんです？」

どこか軽い響きで岸谷玲香に声をかける。

「誰ですか？」

真言の位置からは岸谷玲香の表情は見えないが、口調で十分訝しんでいるのが分かる。

「ああ、そうか。お目にかかるのは初めてですよね。どうもー、+
プラス探偵事務所の所員です」

岸谷玲香が息を飲む音が、微かに真言の耳に届いた。

岸谷玲香が車内を覗くように腰を屈めたので、真言からも岸谷玲香の顔が見て取れた。

「ああ、本当。探偵事務所にいた子ね」

言われて、真言は会釈する。

「そんなことより、こんなところで何してるんです？ 憎つくき男の後をつけるなんて物騒ですね」

清吾の言葉に、岸谷は眉を寄せて視線を道路に落とした。

「とりあえず、乗ってください。あいつらの後をつけてるってことは、この先特に用事はないってことでしょう？」

顔を上げた岸谷は、いささか気分を害したような表情になる。

真言はそれを見逃さなかったが、清吾は気にした風もなく後部座席のロックを解除した。

「さ、乗ってください。あいつら見失っちゃいますよ」

その言葉に覚悟を決めたのか、岸谷玲香は車に乗り込んだ。

日が沈んだ後の街はネオンにきらめいている。通が歩きたびに耳慣れないハイヒールの音が、辺りに響く。

広い車道の脇に止められた見覚えのある車を見つけて、そちらに歩み寄った。助手席の窓を叩くと、すぐに窓が下がる。

「お疲れ様です」

笑顔で、真言が通を迎えてくれた。それに笑顔を返してから、通は後部座席のドアを開けて中に入ろうとした。

その動きが途中で止まる。後部座席に人が乗っていた。見覚えのある女性の姿を目にした途端、通は声を上げた。それは、先に後部座席に座っていた女性も同じだった。

「あつ」

通の声と女性の声が重なった。

「あの人と一緒にいた……」

「ええつと、岸谷さん？」

慌てる通を見て、運転席に座る清吾が笑っている。

「あの、通さん。なんだかこんなことになりました」

真言が振り返り、情けなさそうに笑顔を浮かべた。

「うん、清吾がまた暴走したんだね」

通の分かったような言葉に、清吾が反論する。

「暴走じゃねーだろ。あのまんまじゃ元婚約者に、この人が後付けてるのばれてたしな」

通は肩を竦めて、車に乗り込むとドアを閉めた。

「あの、あなたは……」

「ああ、そいつも所員です」

清吾が未だに驚きの抜けない表情をしている岸谷に声をかける。

「ああ、そうなんですか」

どこか放心したような調子の岸谷に、通はどうもと会釈した。

「どうだった？ 元婚約者の印象は」

清吾が、バックミラー越しにこちらに視線をやったので、通はまた肩をすくめて見せた。

「どうって、そうだなあ。女性受けするタイプだろうね。女性の口説き方を知ってるって感じ」

通の答えを清吾は人の悪い笑みを浮かべて聞いていた。

「に、しても暑い。あー疲れた。早く着替えたい」

足を開き、スカートを持ち上げてパタパタと振っていると、隣から遠慮がちな声が聞こえてきた。

「あの、失礼ですけど」

その言葉に、通はしまったと思う。隣に岸谷玲香が乗っていたことをすっかり忘れていた。

「あ、すみません。見苦しいですね」

スカートから手を離して、笑顔を向けると困惑顔の玲香と目が合った。

「いえ、見苦しいとかではなくて。あの、もしかして、あなた、男性なんですか？」

通はその声に、目を丸くしてから、苦笑を洩らした。

「ははっ。もしかしくても男性です」

通が答えると、運転席から盛大な笑い声が聞こえてきた。

「無理無理、お前女にしか見えねーもん」

「悪かったな」

険のある声で答える通の耳に、清吾だけでなく真言や玲香の笑い声も届く。

まったく、これだから女装は嫌なのだ。

そう思っ、通は視線を窓の外に移したのだった。

+ 第六章 婚約者

岸谷玲香を連れて事務所へ戻った。応接室に玲香を連れて行き、お茶を出す。所長である茉莉が玲香の前のソファに腰を下ろした。「困りますわね。ターゲットの後を勝手につけてもらっちゃ」

足を組んで開口一番、茉莉は言った。真言はお茶を出した後、部屋を出ようとしたが、茉莉に呼び止められた。そのまま茉莉の隣に座らされている。

通は化粧を落としに洗面室へ、清吾はきつと隣の部屋でこちらの様子をモニターで眺めているだろう。

「下手に動いて、こちらの動きを勘付かれたらどうするんです」

責める口調ではなく、淡々とした物言いだ。玲香を見ると、体を小さくするように、足に手を置いて、俯いている。

「すみません。家でじつとしていられなくて」

「こちらが信じられない？」

「いえ。そんなことは……」

茉莉の言葉に、慌てたように顔をあげて、否定した。玲香は視線を彷徨わせながら、口を開く。

「あの、姉の婚約者だと名乗る男のこと、少しでも分かりましたか？」

茉莉は頷いた。艶やかな笑みを浮かべている。男なら魅了されること間違いなしだろうが、いかんせん相手は女性なので、効果の程は分からない。

「さ、真言。説明して差し上げて」

笑顔を持続させたまま、茉莉が真言に顔を向ける。

え？ 僕が？ と、思ったが、茉莉がすつつと目を細めたので、慌てて顔を正面に戻した。どうやら、このために残れと言われたようだ気づく。

「えー、岸谷さんのお姉さんの彩香さんの、婚約者は、えーっと」

「もつとスムーズに！」

茉莉に言われて、思わずはいと、歯切れのいい返事をしてしまった。頬が熱くなる。玲香を見ると、口元に手をあてて小さく笑っている。緊張がとけたようだ。

「すみません。えっと、彩香さんの婚約者の伊藤芳郎いとうよしろうの職業は水商売。いわゆるホストです。でも、今はホストクラブはやめてしまったようです。お姉さんとは、そのホストクラブで知り合ったようです」

これらは主に清吾と通がこの二日で調べ上げたことだ。スムーズにと言われたが、所々つかえながらそこまで言った。それでも、玲香は頷きながら聞いてくれている。それに勇気づけられて、真言は続きを口にする。

「自分でクラブを経営していたこともありましたが、上手くいかず、あちらこちらから借金をしていて首が回らなくなっているようです」

「そう、やっぱりお金が目的だったのね」

小さく吐き捨てるように、玲香が言った。

「お金が欲しくて、姉さんに近づいたんだわ」

「そうかもしれませんが、ですが、まだ婚約した段階ですし、婚約しただけでは遺産相続は……」

「遺言があつたんです。遺言発表の場にあの男が呼ばれました。全額、婚約者に渡すと遺書には記されていました。あれも、あの男に強要されて書いたに違いないんです」

やけにきつぱりと玲香は言った。真言と茉莉は顔を見合わせる。

「お姉さまにはそんなに多額の財産がありましたか」

茉莉の言葉に驚いて、真言は隣をそつと見る。玲香の姉が多額の資産を持っていたのは調べがついている。亡くなった姉は、玲香より二歳年上ながらも大会社の社長をしていた。真言にはよく分からないが、IT関係の仕事だそうだ。

玲香と彩香の他に病気がちな兄があり、兄はその会社の理事に名

を連ねているところまでは聞いている。

「ええ。親の会社を継いでいましたから。お願いです。姉を殺したあの男が、姉の財産を受け継ぐなんて耐えられませんが、あの男に財産が渡らないようになりませんか」

「そうですね。その彼が、相続放棄してくれれば楽なんですけど。借金があるならばそれは難しいでしょうね」

茉莉の言葉に、玲香は難しい顔をして黙り込んだ。

そんな玲香に茉莉は言う。

「ですが、彼自身に相続放棄してもらうように仕向けることはできません。彼はどうやら、叩けばたくさんのお金が出るタイプの人間のようなので」

「本当ですか？」

「ええ」

茉莉が綺麗に微笑むと、玲香は思いつめた表情で茉莉を見た。

「私もお手伝いできませんか」

玲香の目の色を見て、真言は息をのむ。何を考えているのだろうか。この人は。そう思う。もっと彼女の考えていることを見たくなかったが、真言は諦めた。好奇心で覗いていいものではないと知っているから。

「一人で家にいても、姉のことばかり考えてしまいますし、何かやっていないと落ち着かなくて。お願いです。どんな雑用でもいいので、私に何かお手伝いさせてください」

身を持ち出すようにして言いつのる玲香に、茉莉は嘆息して見せた。

「岸谷さん……」

「ダメでしょうか？ 邪魔はしません」

真剣な表情の玲香をじつと見つめて、茉莉は小さく頷いた。

「分かりました。ただ、お手伝いはしていただくなくて結構です。

彼の尾行や、調査に同行していただくということはどうでしょう？」

「え？ 姉さんそれは」

姉のありえない言葉に耳を疑って、真言は声を上げた。そんな真言を綺麗に無視して、茉莉は口を開く。

「いかがです？ 岸谷さん」

「それで、構いません」

頷く玲香に、茉莉も頷いて見せた。そして、ふと思いついたように声を出した。

「岸谷さん。あなたは、彼がお姉さまを殺した犯人だと思っていらっしやるようですが、もし、彼が犯人ではなかった場合、どうしますか？ それでも、彼に遺産を放棄させますか？」

その問いに、岸谷玲香は頷いた。

「ええ。もちろんです。姉をだましていたことに変わりありませんもの」

玲香の目はひどく冷たい色に見えた。

通は化粧を落として普段着に着替えると、応接室の隣の部屋へ向かった。

ドアを開けると、案の定清吾はソファーに座り、机の上に足を乗せてモニターを見ていた。だらしない格好である。

「おー、通子じゃなくなったのか、もったいねーな。カーワイかったのにい」

からかうような表情と口調で、清吾が通に目を向けた。通は唇を尖らせた。

「そんなこと言ってる、あげないよ」

そう言っ、手に持っていたものを清吾に向かって振ってみせる。清吾は途端に取り繕うような笑顔を浮かべて、通に手を差し出した。

「冗談だろ。冗談。さっさとよこせ」

偉そうな物言いに苦笑して、通は清吾の横に腰掛けると、持っていたアンパンを清吾に手渡した。清吾は嬉しそうにパンの袋を破る。

このアンパンは先ほどまで通が服の下に入れていたものだ。そう、胸の膨らみ用である。胸用なのでアンパンは二個ある。もう一つを通は自分で食べることにし、袋からパンを取り出した。

「女つてのは、怖えよな。こう、思いつめたらとことんって感じがさ」

「岸谷玲香さんのこと？」

清吾の方を見て聞くと、清吾はパンに齧りつきながら頷いた。

「岸谷玲香が、今後尾行に同行することになったみてえだぜ」

「ふーん」

そっけない返事をする、清吾がメガネの奥の瞳を細めてこちらを見た。

「ふーんて、お前。普通ねえだろ。依頼人同行で尾行なんて。茉莉は何考えてんだか」

「いろいろ考えてるんだろうね。茉莉ちゃんだから」

通の発言に、清吾は眉をあげた。

「ふんつ。お前はいいだろうさ。相手はあいっだからな。必然的に俺があの子の面倒見る羽目になるじゃねえか」

心底嫌そうな顔をする清吾に、通は笑顔を向けた。

「美人だつていつてたじゃないか。目の保養だとも思っておけば？」

「お気楽思考な奴」

「それが取り柄だから」

そう言つてまた笑顔を作ると、つられたように清吾の表情も緩むのだった。

+ 第七章 能力

自分が人と違うモノを見ていると気づいたのは幼稚園に入ったときだった。真言には、人の目が感情に合わせていろんな色に変わっているように見える。それが当たり前だったから、それがおかしいことだとは思ってもいなかった。

誰しもが、同じように見えているのだと思っていた。

それがおかしいことだと気づいたのは、幼稚園に外国人講師が来た時だった。

皆が一様に青い目を珍しがっている横で、一人真言はその外国人講師の目の色が分からなかった。

真言にとつて、人の目は様々な色に変わるものだったからだ。

その時、真言には外国人講師の目は黄色く見えていた。

友人や先生にそう言ったが、おかしい、嘘をつくなどというようなことを言われた。嘘じゃないと言ったのに、誰も信じてはくれなかった。

それは、身内であるはずの両親でさえも同じだった。

唯一、真言の言うことを信じてくれたのは姉だ。

姉自身は、人の頭の上にその人の未来が見えるのだと言った。それは、自分一人が他人と違うと思ひ悩む弟のためについた方便だったのかもしれない。だが、真言はそれが真実だと知っていた。真言には、感情が色で見える他にも一つ、見えるものがあつたからだ。人の目は真実を映し出す。

感情というフィルターの奥を覗けば、その人の過去に見たモノを見ることができるのだ。見ようと思えばいくらでも。まるで本のページを開くように。

姉と二人で色々試した。人の目が何色の時に、どんな感情なのか

を調べたり、どうすれば感情を見なくて済むかということも試してみた。眼鏡をかけて見てはどうか、見えなくなれと念じて見てはどうか。いろいろと二人で考えた。

結局感情という色を見えなくすることはできなかったけれど。

それでも、姉と過ごしたその時間は、真言にとって、自分を知る貴重な時間となった。

姉と二人で暮らしているマンションは、とても立派なものだった。十年前に母が亡くなり、八年前に父が再婚した。真言は去年まで父と義母と三人で暮らしていた。

高校入学を機に、姉と一緒に住まないかと誘ってくれたのだ。正直、義母とはあまり上手くいっておらず居づらい思いをしていた真言は、姉の言葉に甘えることにしたのである。

茉莉は父が再婚してすぐに家を出ていた。もともと父とそりが合わなかったのも一つの原因だろうと、真言は思っている。

茉莉の作った夕食を食べ終えて、冷えた麦茶を飲んでいるときだった。

茉莉が珍しく殊勝な声を出した。

「ねえ、真言。辛いなら、抜けてもいいのよ」

化粧を落とした姉の顔は、いつもよりも幼く見える。スツピンの方が可愛いのに、真言はいつも思う。

「どういう意味？」

「無理に手伝わなくてもいいってことよ。いろいろと辛いでしょ？
見たくないものばかり見えて」

真言は、麦茶の入ったコップに視線を落とした。

「別に。平気だよ。そんなこと」

「また言ったわね。真言」

茉莉の言葉の意味が理解できず、首をかしげて見せる。茉莉は溜息をついた。

「まあ、いいわ。辛くなったら我慢せずに言いなさい。これからが、本番だからね」

姉の言葉に力強く頷いた。そして、疑問に思っていたことを聞いてみる。

「姉さん。どうするつもりなのさ。岸谷さんを同行させるなんて。動きにくくなったりしないの？」

「いいえ。彼女が近くにいてくれた方が、楽よ。彼女が今日みたい暴走するのを防げるしね」

そう言っ て茉莉はウインクする。そう言えば、小さいとき二人でウインクする練習をしたっけなどと思いだした。

「明日は、通をまた伊藤芳郎と接触させるわ。清吾と真言には岸谷さんと一緒に彼らの動向を見張ってほしいの」

「分かった。今日みたいにするばいいってことだね。ところで、姉さん。岸谷さんには、伊藤芳郎と通さんはどうやって接触したって言っ といたらいい？」

真言の問いに、茉莉は不適な笑みを見せた。

「そうね。通は、亡くなった彩香さんの友達という触れ込みで、芳郎の元を訪ねたと言っ ておいて」

茉莉は麦茶を飲み干すと、立ち上がった。

「そろそろ部屋に戻るわ。真言、明日うどん、事務所に持つて行くっ て覚えといてね」

仕事の話から、いきなりうどんに代わっ て真言は面食らった。

「え？ うどん？ 事務所に？」

発した言葉はすべて疑問形になった。

「そう。賞味期限一週間も切れてたのよねえ。清吾にあげようと思っ て」

真言は姉のセリフを聞いて頬をひきつらせた。

「ね、姉さん。清吾さんのこと、残飯処理として使っ てない？」

もしくは、ゴミ箱扱いなのではと真言は疑った。

茉莉は口元に笑みをのせる。

「ふふふ」

答えを待つ真言に笑い声を残したまま、茉莉はダイニングを出て行ってしまった。

「うーん。清吾さんごめんなさい」

なんとなく申し訳なくなつて、ここにはいない清吾に謝った。きつと今頃くしゃみをしていることだろう。

はーつくしよい！

盛大なくしゃみを一つすると、電話の相手が苦笑したようだった。

『なんだ、風邪か？』

「いや、誰かが噂してるんだろう。ほら、俺ってモテルから」

冗談だが、本気の口調で言うと、電話の相手が同意の言葉を吐いた。

『そうだな』

「お？ 認めるのか？」

意外に思つて声を上げると、相手が笑い交じりにこう言った。

『ああ、犬猫にな。犬猫以外にもか？ 人間以外って言った方が正解か』

失礼な野郎だ。

清吾はフンつと鼻を鳴らした。

『怒るなよ』

「別に怒つてねーよ。で？ お前のまわりは今のところ何にもないのか？」

清吾が聞くと、相手の笑い声が電話口から聞こえてくる。

『心配してくれてるのか？』

「気持ち悪い言い方すんな」

清吾は含みのある口調で言った相手に、げんなりした気分で言い返した。

「で、どうなんだよ」

怒った口調で言うと、相手はまじめな口調で返してきた。

『今のところは特に問題ない』

「気は抜くなよ」

言うのと、同意が返ってきた。

『ああ。で、そっちはどうなんだ？ 上手くいってるのか』

「まあ、それなりに。じゃあ切るわ」

『清吾、裏切ってるって、バレないように気をつけろよ』

「余計なお世話だ」

清吾は通話を切って、鼻を鳴らした。携帯電話を机の上に放り出し、隣の机に突っ伏している同僚の頭を小突いた。

「おい、起きろ。帰るぞ」

「痛いなあー」

文句を言いつつ起きあがった通は、きよろきよると辺りを見回して、不思議そうな顔をした。

「あれ？ 家じゃない」

「寝ぼけてんじゃねーよ。たまってた仕事片付けてたんだろ？ もう、十二時過ぎてんだよ。送ってってやるから早く眼を覚ませ」

「んー、ありがとう清吾……」

そういう声がだんだん小さくなったのを不審に思い隣に目を向けると、また通が机に突っ伏していた。

「だから、寝んなー!!」

清吾は立ち上がって、通の座る椅子を蹴りつけたのだった。

+ 第八章 芳郎と通子

仕事を終えて、支度する時間を考慮すると、待ち合わせ時間は六時半がベストだということになった。

小さな会社の事務職をしていることになって通は、今は通子とおことして待ち合わせ場所に立っている。肩までかかる髪がふわふわとウェーブがかっているのは、茉莉が面白がって髪を巻いたからである。

前回同様、今回も茉莉の見立てで清楚系お嬢様チックな女装をしている。

胸元につけられたブローチには、小さなマイクが仕込んである。ここからは見えない場所に待機している車中の仲間たちに、会話が聞こえるようになっていく。

ほどなくすると、伊藤芳郎がやってきた。一目でブランド品と分かる高価そうなクリーム色のスーツを着こなしている。あいさつ代わりに上げた片手には、しっかりと金の腕時計が見えていた。ブランド物、推定二百万円はするだろう品だ。

「ごめんね。待った？」

気遣う口調の芳郎を見上げれば、いかにも女性にモテそうな爽やかな笑顔が目に入ってきた。

少したれ気味の目もとだが、品がないわけではなく、きつくなりがち端正な顔に柔らかみをプラスしてくれている。

総評して良い男である芳郎に、通も通子として、笑顔を向けた。

「いえ、私も先ほど着いたばかりなので」

しおらしく返事をする。伏し目がちなのは、通子が大人しい女性という設定だからだ。

「急に食事に誘ったりしてごめんね。彩香が亡くなってから、どうにも一人で食事するのが淋しいんだ」

辛そうな表情を見せる芳郎に、通はいいえと首を横に振って見せ

た。

「私も、彩香がいなくて淋しいので、一緒ですね」

言葉の最後に笑顔を付けて、好意的であることをアピールしてみる。芳郎も笑顔を返して、二人で歩きだした。

これから、ホテルでディナーだ。普段の通なら絶対に足を運ばない場所だが、通子は金持ちという設定なので、食べ慣れている風を装わなければならない。

着なれない女物の服を、早く脱ぎたいのだが、仕事はまだ始まったばかりだった。

「彼、完璧に女性みたいですね」

イヤホンから聞こえる芳郎と通の会話を聞いた玲香の始めの感想がそれだった。

「に、しても笑えるな。男が男を口説いてる声聞いとると」

笑いを含んだ声は、運転席にいる清吾の口から洩れた。真は助手席から清吾を見やった。

「一応、今通さんは女性なんですよ」

窘めたが、清吾は分かっているといいながらまだ笑っている。心底面白がっているのは、目の色から見て取れた。

清吾の言うとおり、先ほどから聞こえてくるのは、芳郎が通を口説いている声だった。婚約者を亡くしたことを悲しむ素振りを見せながらも、いかに自分が今、人恋しいか。女性の同情を引くように上手く言葉を選ぶセンスはさすが、元ホストというべきだろう。

フィアンセを亡くしたばかりなのに、お盛んなことである。姉さんが死んだばかりなのに、この男……」

伊藤芳郎はかなりの女好きであることが分かっていると、玲香には伝えていた。そして、何人もの女性に貢がせては、紐のような生活をしてきたことも。

彩香が亡くなって、新しい金蔓を探しているはずの芳郎に、新しいカモを目の前にぶら下げて見せた訳だ。それに食いつかせるかどうかは、通の腕次第である。

『ねえ、芳郎さん。彩香は本当に事故死なんでしょうか』

通が、今日必ず聞いてくるようにと茉莉から言われたセリフを口にした。

清吾の笑い声がやむ。

『どうして、そんなことを？』

声からは、動揺は感じられない。

『彩香は泳げないのに。一人で湖に向かうなんて信じられなくて』

『ああ、確かにね。でも、彩香はかなり酔っていたと聞いたよ。前後不覚で湖に向かっていている自覚すらなかったのかもしれないな』

少し悲しみを帯びた芳郎の声が、真言たちの耳にも届く。

『前後不覚の人間がそもそも別荘から湖まで行けるんでしょうか。』

彩香はもしかしたら誰かに……』

そこまで通の声が聞こえたとき、かぶせるように芳郎の声が響いた。

『通子さん。めったなことを言うもんじゃないよ。ほら、眉間に皺が寄ってる。可愛い顔が台無しだ』

慌てて身動きする音が、イヤホンから漏れ聞こえる。真言の隣から、小さな笑い声が聞こえてきた。今のセリフがまた、清吾の笑いのツボを突いたらしい。

『でも、まあ。僕もおかしいとは思っていたんだよね。もし、彩香が殺されたんだとしたら……』

そこで、一旦声が途切れた。しばらく回りの雑音だけが耳に届く。犯人は大方、見当がつくよ』

真言はそつと背後を振り返った。後部座席に座る玲香は、恐ろしい形相をしていた。

『誰ですか？』

『さあ、誰だろうね』

嘯く声。

「やっぱり、犯人は彼だったんだわ」

呟く声が、玲香の口から洩れた。真言の耳に届いたその声は、確
信に満ちていた。

+ 第九章 犯人

自宅に帰ると、また、郵便受けに封筒が入っていた。封を開けると、中には飾り気のない白い便せんがあった。

『人殺し』

わざわざ新聞の字を切り抜いて文字が連ねられている。手にした便せんを手の中で丸め、ごみ箱に放り込んだ。

手近にあった壁を殴る。

事故に見せかけることに成功したというのに。

邪魔ばかり入る。

証拠などあるはずがない。

そう思うのに、後から後から不安が募る。

よろよろと歩き、ごみ箱に放り込んだ便せんを拾い上げた。

『人殺し』

台所まで歩き、ライターで、その紙に火をつけた。

紙はあっという間に火に包まれる。

燃え尽きる少し前に手を離れた。灰と化した紙が流し台の中へ落ちる。

知られているはずがないのだ。

あの日、あの場所に、他に誰もいたはずはないのだから。

学校を終えて、真言が事務所のドアを開けると、珍しく姉の茉莉が古い師の衣装をつけたまま机の前に座っていた。金銀の装飾が施された、ゆったりとしたローブ風の黒い衣装である。

「ただいま、姉さん。今日は占いの日だったんだね」

真言が額の汗を手で拭いながら言うつ、茉莉は頷いた。

「そう。予約が三件入ってたからね。疲れたわー」

「お疲れ様。ねえ、清吾さんと通さんは？」

「デート」

ウインクして言われた茉莉の言葉に、真言は思わず声を上げた。

「ええ？ 二人が」

すると、茉莉が可笑しそうに声をあげて笑いだす。

「あはは。違うわよ。芳郎と通子がデート。清吾には後をつけてもらってる」

言われて、妙に恥ずかしくなった。少し考えれば分かることである。

「じゃ、じゃあ、岸谷さんも一緒？」

話を変えようと思いついたことを口にする。すると、予想通りの答えが返ってきた。

「そうよ、彼女のやる気は本気みたいね」

「大丈夫なの？ 彼女、伊藤芳郎のことかなり良く思っていないけど、また暴走したりしないかな」

聞くと、茉莉は頷いた。

「大丈夫よ。清吾がいるから」

「清吾さんで大丈夫なの？」

で、を強調して言ってみる。

茉莉は真言から目を逸らした。肩に垂らした髪を人差し指でくるくると巻き始める。

「んー。たぶんね」

ずいぶんたってから、頼りない返答があった。

明日は学校が休みだし手伝おうかと申し出たところ、茉莉から清

吾と合流するようにとお達しがあつた。

事務所で事務作業をこなした後だったので、すっかり日が暮れていた。

色々と準備をして、清吾の居る場所の近くに着いたのは、午後十時を回っていた。

清吾がつけている発信機を頼りに歩いていると、見知らぬ狭い路地に足を踏み入れてしまっていた。住宅街のど真ん中といったところだろうか。回りは一軒家が多く、真言がいるのは家と家との間の狭い路地だった。

「この近くにいるはずなんだけど」

思わず独り言を言ってしまう。路地を右に曲がると、ふいに視界が開けた。少し広い道へ出たようだ。

そこは丁字路になっており、左右のどちらかにしか進めない。とりあえず左に顔を向け、真言は人影を目にし、足を止めた。

岸谷玲香と清吾がいた。電信柱の影に立つようにしている。二人の先には通と芳郎が寄り添うようにして歩いている姿があつた。等間隔に立っている街灯のおかげで、二人とその先にいる通達の姿はつきりと見て取れる。

この道に出てやっと分かった。近くには確か芳郎の住むマンションがあるはずだ。一度、清吾と一緒に来たことがある。

真言は、そつと清吾と玲香に近づいて行った。背後から声をかける。

「清吾さん、岸谷さん」

「どつ！」

驚いたのか大きな声を出す清吾に向かって、慌てて人差し指を口元にあてた。

「しっ、静に……」

「どつから湧いて出た」

酷い言い草だ。真言は眉を顰めた。前方にいる通と芳郎を気にしながらも口を開く。

「背後からだよ。えっと、こんばんは、岸谷さん。今日はずっと二人の後付けてたんですか？ 疲れたんじゃないやありません？」

「ええ、まあ」

玲香はどこか浮かない顔をしている。

「おい、真言。俺、ちよつと車取って来るから、お前後よろしく」
言うが早い、清吾は踵を返して走り去る。

「え？ ちよつと」

その背に向かって、声をかけたが、大きな声を出すわけにはいかない、その声が清吾に届いたかどうかは疑わしい。

「岸谷さん、とりあえず、行きましよう」

小声で玲香に言くと、玲香は頷いた。

二人揃って足音に気をつけながら、かといって気負わないように歩く。

「ねえ、真言くん。あの人、姉さんのこと本当に好きだったのかしら」

真言は歩きながら玲香を見た。玲香はじつと前を見据えている。

真言は少しだけ考えてから口を開いた。

「さあ、どうだったんでしょうね。あの人、女癖の悪さは有名だったようですし、すぐに通さんに靡なみいたところを見ると、金蔓なみとは思ってなかったのかもしれないね」

真言は玲香の様子を伺う。玲香の目の色は分かりにくかった。いろんな感情が入り混じっているように思う。

「おーおー。なんでえ、カップルか？」

数メートル先に行く通達に視線を移したときだった。横から突然声をかけられ驚く。

真言が声のした方を見ると、スーツを着た男性の姿が目に入る。

どうやら、横の路地から出てきたところらしい。

ふんわりと、空気につて、酒臭い臭いが漂ってきた。

真言は玲香の腕を掴んで、耳に口を寄せる。

「絡まれると面倒だから、後に向かって走ってください。近くに清

吾さんが車を回しているはずだから」

掴んだ腕を離すと、玲香は頷いて後ろに向かって走って行った。その後ろ姿を見送っていると、急に腕を引っ張られた。

「おい、兄ちゃん。振られちゃったなあ」

言葉の最後には、しゃっくりのオマケがついていた。真言は嫌悪感を抱いて顔を顰める。

「おい、兄ちゃん。聞いてるかあ」

「うわっ、酒臭っ」

いきなり掴まれていた腕をひかれ、そのまま肩を抱かれた。男は、真言に顔を近づけてくる。酒臭い息が顔にかかり、一気に気分が悪くなった。肩に置かれた手を外そうにも、意外なほどに力が強く、一向に外れない。

「あの、何なんですか？」

「ダメダメ。女泣かせちゃあいけねえなあ」

いや、泣かせてはいないが。

真言は後悔した。自分も一緒に逃げればよかったと。

「あの、離してもらえませんか」

遠慮がちに言つと、顔を近づけたまま、酔っ払いはにんまりと笑つた。

「よっし。可哀そうな兄ちゃんには、おじさんがあ。ヒック、一杯おごつてやるう」

さ、行こう行こうと、真言の肩に腕を回したまま動きだすので、真言は足をもつれさせた。危うく転びそうになる。

「もう、やめてくださいよ。僕は、未成年だし。ちょっと、いい加減にしてください」

「おじさんも振られちゃったのよー。可哀想なのよー。もうこうなったらあ、可愛い男の子でもいいや。なっ」

なつて何だ。意味が分からない。酔っ払いはそういうものなのか。

どうしようかと、思っている間にも、ぐいぐいとひっぱられる。

肘鉄でも食らわせてやろうかと、物騒なことを考えたとき、背後から声かけられた。

「おい、嫌がつてるじゃないか」

真言はその声に聞き覚えがあった。肩に乗った重さがなくなり、振り返ってみると思つたとおりの人物が、酔つ払いの腕を持ち上げていた。

「酔つ払いはさつさと帰つて寝な」

そう言つて、その人物は男の腕を離す。

「な、何すんだよう。みんなして俺を邪険にしゃがつてよう。おじさんはあ。泣いちゃうぞう。いい男だからつてなあ。調子にのつてんじゃねーぞー。バカらるー」

バカ野郎と言いたかつたのだらうが、ろれつが回っていない。

男は悪態をつきながら、よろよると走り去つて行つた。

真言は安堵の息をついたものの、この後どうするかを考えた。まだ、近くに玲香がいるかもしれない。

「君みたいな若い子が、こんな時間に歩き回るものじゃないよ」

そう言つたのは男性の声だ。真言はそつとその男性を見上げた。

真言よりも、十センチ以上はある身長。少したれ気味の目。ハンサムという言葉が似合う容貌の彼の名は、伊藤芳郎。真言が先日からずっと見張っていた人物だった。

「すみません。あ、ありがとうございました」

とりあえず頭を下げた。

「……君、最近、僕の後をつけているよね？ どうしてそんなことするんだい？」

真言は驚いて目を見開いた。そんなことを言われるとは思つていかなかった。

頭が真つ白になった真言の目に、通がスカートを翻しながら、走り寄ってくる姿が見えた。走り方すらも女性のようにだ。徹底している。

「あ、やっぱり真言。どうしてこんなところに？」

いつもよりも幾分声まで高い。やっぱり凄いやこの人と、どうでもいいことを考えてしまったので、通の質問に答えるのが遅くなる。「え？ あ、その」

混乱したまま声を出したせいか、言葉にならなかった。

通は、眉をひそめて真言を見た。

「もう、私の後をつけてたのね。すみません、芳郎さん。この子私の弟なんです」

ナイスフォロー通さん。真言は通の言葉に心の中で喝采を浴びせながらも、口を開く。

「ご、ごめんなさい。姉さん、世間知らずだから心配で。ずっと後つけてました」

真言は言うなり頭を下げた。芳郎が小さく噴き出す。畜生、本気で面白がってる。

真言は顔をあげ、芳郎の目の色に気づいてそう思った。芳郎の目は、黄色く光っていた。

+ 第十章 誰を呼んでる？

酔っ払いに絡まれたところを芳郎に助けられてから、真言は通と一緒に芳郎の住むマンションでお茶を飲んで帰ってきた。もちろん、通子の弟という設定を維持したままである。

ぼろを出さないようにと緊張したせいで、もう、なんだかとても、ぐったりである。

真言は事務所の自分の席について、机に突っ伏した。

「何か、疲れた」

「俺も疲れたわ。一日あのお嬢の世話だぜ。お前は来たと思ったら、おっさんにナンパされてるし」

ナンパされたんじゃない、からまれただけだ。

気づいていたなら、助けてくれればよかったじゃないかと思う。

真言は顔を上げて、清吾を見やった。

「お、何だ？ 俺にモノ申したいことでもあるのか？」

ある。あるが、今はもう疲れたので口を開きたくなかった。

「別に」

簡単な言葉でごまかす。

「お前、それ口癖な」

真言はその発言に眉を顰めた。

「どういう意味ですか？」

机から身を起して聞いてみる。清吾は中指で眼鏡を押し上げる仕草をした。

「そのまんま。お前、よく言ってるぜ？ 別につて」

そうだろうか。真言が首をひねっていると、化粧を落とし、着替えを終えた通が部屋に入ってきた。肩まで伸びた髪はいつものように、後ろでくくっている。

「マコツチー」

通が冷蔵庫を開けて、声を上げた。

何の呪文だろうか、真言が冷蔵庫の前でしゃがんでいる通をみると、また通が声を上げる。

「マコッピ。聞いているー？　おい。マコピッピー」

真言ははっと目を見開いた。

「通さん、もしかして僕呼んでます？」

「そうそう。マコッチ、マコッピ、マコピッピー」

どこか歌うようにリズムを取りながら、通は真言に顔を向けた。

「通さん、三段活用みたいに言うのやめてください」

疲れた声が出た。通は笑顔を真言に向けた。

「はいはい。マコピン。紅茶でいい？」

今度はマコピンかと思いながら、真言は頷いて見せた。

通は冷蔵庫から、ペットボトルを三本取り出し、ミネラルウォーターを清吾に、ミルクティーの入ったペットボトルを真言に手渡した。通自身は炭酸飲料である。炭酸飲料のペットボトルの蓋を開けるととき特有の音が部屋に響く。

「清吾。今日はどんな感じだった？　岸谷玲香さん」

通はペットボトルに一度口をつけてから、自分の席に着いた。清吾は机の上に足を乗せ、椅子の背もたれにだらしなく寄り掛かる格好で口を開く。

「ああ。あの女な。何考えてるかよく分かんねーな。いろいろ、聞いている見たけど、こっちが調べた情報と対してかわんねーし。まあ、芳郎への憎悪は感じたかな」

清吾が珍しくまともなことを言っていると、驚いた真言の横で、通は頷いた。

「そうだね。あの人初めから芳郎のこと良く思ってたなかったみたいだし。ま、貰えると思ってた遺産を横取りされたようなもんだから、良く思ってたなくて当たり前か」

嘆息しながら、通は言った。清吾が肩をすくめている。

「どうして、殺したりしたんだろっね」

真言はついその口を滑らせた。清吾と、通は同時に真言に顔を向けた。

「マコマコは、岸谷彩香さんは依頼人の言うように殺されたと思ってるんだ」

「確証は何もねえだろ。事故死で片付けられてんだし。何でそう思うんだ？」

清吾に聞かれて、真言は目を伏せた。

「別に、なんとなく」

「ほら、また言った」

え？ と、顔を上げて見れば、清吾が意地の悪い笑みを浮かべていた。

「何？ 何のこと」

通が興味をひかれたようにそう言った時。奥の部屋へ続くドアが開いて、茉莉が出てきた。

先ほどまで電話していたようだが、どうやら終わったらしい。

茉莉は、どこか楽しそうな表情で、三人の顔を見まわした。

そして、こう告げる。

「皆、明日しかけるわよ」

茉莉の声に、真言たちは一度顔を見合わせ、口ぐちに了解と声を上げた。

+ 第十一章 部屋にて

その日もきつちりと学業を終えると、その足で近く的大型スーパーへ向かった。

スーパーの入口付近で岸谷玲香と待ち合わせをしているのだ。

真言はスーパーの前で、玲香と落ち合うと挨拶もそこに、揃って中へ入った。

青果コーナーを通り過ぎ、加工食品コーナーをひやかした後、二人揃って酒コーナーに着いた。

目的はお酒の購入である。

「やっぱり、プレゼントならワインが良いですか？」

今日、通が伊藤芳郎の家で食事をする事になっていたので。その時、持って行く酒を選びに来たのである。

「そうね。ワインも好き好きだけど。ワインより日本酒が好きって人もいるし」

玲香は細い腕を伸ばし、一本のワインを手にとった。

「この赤ワインはおいしいわよ。値段も二千五百円で手頃だし。あ、お金持ちって設定ならもつと値段の張るものかいいのかしら」

考えるように形の良い唇の前に手をあてている玲香に、真言は苦笑してみせた。

「いいですよ。それくらいの値段で、予算がそんなにないんです。

設定こそお金持ちのお嬢様ですけど。ウチは貧乏な探偵事務所なんです」

「ふふつ。なら、通さんにはおいしいからこれって言うてもらおうか」

そう言って、持って来ていたカゴに、ワインの瓶を入れた。さらに、玲香はもう一本ワインの瓶に手を伸ばす。

「え？ まだ買うんですか？」

軽く驚いて、聞いてみると玲香は、はにかむような笑顔を見せる。

「ええ。ちよつと安いから、自分の分も買おうかと思って」

「ああ、なるほど」

真言は納得して、カゴを差し出した。そこに、玲香がワインを入れる。

二人でレジまで行くと、結構混雑していた。どのレジも五人以上並んでいる。真言は比較的カゴの中身が少ない人を見計らって後ろに並んだ。横には玲香もいる。玲香には申し訳ないがいてもらわなければならぬのだ。

「ごめんね、真言くん。重いでしょう」

ワインの瓶が二本になったからといって、重いなどとは言ってもらえない。それでも男なのである。

「別にそんなに重くないですよ。それにこちらこそすみません。付き合ってもらっちゃって。ウチの人たち皆用があつて買い出ししなかったんで。僕だけだと、お酒売ってもらえないし」

『当店は未成年者への酒類販売はお断りしています』と、店内に掲示されているのだ。そのために成人が必要だったのである。

「いいのよ。少しでもお役に立ててよかったわ」

にこやかに笑う玲香から、真言は目を逸らした。しばらく会話のないまま、順番が来るのを待つ。

「お姉さんが死んで、悲しいですか？」

真言が呟くように言った。列が動いて、二歩前へ出る。

「……どうして、そんなこと聞くの？」

尋ね返されて、真言はかなり失礼な質問をしたと気づく。こんなこと聞いているのは、玲香が悲しんでいないかのように見えていると言っているようなものだ。

「あ、あの、すみません。変なこと聞いて」

慌てて顔を上げると、玲香はさびしそうな表情で首を横に振った。「いいのよ。気にしないで」

結局、真言の質問に答えはなかった。

玲香の運転する車で、事務所へ着いたのは、午後五時を少し回った時間だった。

事務所に入ると、綺麗に化粧をして、見た目だけは通子になりきった通と、こちらは普段通りに化粧をした茉莉がいた。清吾はいない。

「お帰り。マコぴょん。岸谷さん、ありがとうございます」

「いえ、私が選んでしまったんですけど」

通はまた、玲香に礼を言う。玲香は一度きよろきよと辺りを見回した。

「あの、田上さんは、まだ？」

「ええ、清吾はいま野暮用で出てるんですよ。あとで合流することにはなってるんですけど」

真言は玲香の横から、通と茉莉に向かって声をかけた。

「あ、姉さん、通さん。清吾さんがいないならちょうど良かったかも。岸谷さんが、車で伊藤芳郎のマンションまで送ってくれるってその言葉を聞いて、茉莉は華やかな笑顔を作った。

「ありがとうございます。助かりますわ。では、申し訳ないですが、さっそく出ましようか」

茉莉の言葉を合図に、四人はそろって事務所を後にした。

三十分程車を走らせて、目的地近くにあるコインパーキングに車を停めた。

玲香はトランクを開けて、中に入れていたワインを取り出してくれる。

「はい、真言くん」

呼ばれて、他に意識をやっていた真言は慌てて声のした方に手を伸ばした。

しかし、間に合わなかった。

タイミングが悪かったのだろう。差し出した手には当たったが、掴む前にワインが落下した。

瓶の割れる音が無情に響く。ワインの瓶を包んでいた袋から、赤い色の液体が染み出してきた。

「ああ！ ご、ごめんなさい。どうしよう」

「何やってるのよ、真言」

茉莉が非難の声を上げる。

「あーあ。やっちゃったねえ。ちょっと遅れるって連絡して、今から買いに行く？」

通がフオローするようにそう言ってくれた。

「ごめんなさいね。私がよく見もせずには手を離しちゃったから」

玲香は申し訳なさそうに、項垂れた。

「いえ、玲香さんのせいじゃ……」

そこまで言いかけた時、玲香が突如声を上げた。

「あつ、そうだ。これ、これを持って行ってください」

そう言って差し出されたのは、先ほど割ってしまったものと同じもう一本のワイン。

「え？ 何で二本あるの？」

不思議そうに聞く通に、玲香は笑顔を作った。

「実は、自分の分も買ったんです。よかったら、これ使ってください。包装はされていませんけど」

そう言って差し出されたワインを、通はそつと受け取った。

「なら、これ使って。ちよつとはマシに見えるでしょう」

茉莉がふいにポケットからピンク色のリボンを取り出した。

「何でそんなもの持つてるのさ」

疑問に思っで聞くと、茉莉はお得意のウイंकを披露した。

「おとめ座の今日のラッキーマイテムはピンク色のリボンなのよ」

ああ、さいですか。と心の中で思って、真言はワインに目を向けた。茉莉は何よ面白いといてと、文句を言っているが聞こえないふりをする。

リボンを巻いたワインは先ほどよりもどこか誇らしげに見えた。

芳郎の部屋は五階にある。真言たちは四人そろってエレベーターに乗り込んだ。

三階でエレベーターのドアが開く。真言と玲香は三階でエレベーターを降りた。茉莉が、三階にある空き部屋を借りていたのだ。そこに、待機することになっていた。

茉莉はもう少し通に話すことがあるとそのままエレベーターで上に向かっていく。

真言は、岸谷玲香をともない三階の部屋のドアの前に立った。渡された鍵でドアを開けると、熱い空気が流れてきた。

慌てて中に入り、もともとこの部屋に設置されていたクーラーをつける。しばらくすれば涼しくなるだろう。

「すみません。岸谷さん。暑いですけどとりあえずそこに座ってください」

勧めたのは、黒いソファだ。この日のために茉莉が買ったものである。すべてが終われば、このソファは応接室にあるボロソファと交換される予定だ。

ソファの前には、テーブルが置いてあり、その上にはモニターが置いてある。

「盗撮……ですか？」

玲香が振り向いて真言に問う。真言は頷いた。

「ええ、法には触れるけど、ウチはもぐりの探偵事務所ですから。内緒にしてくださいね」

玲香は微笑んだあと、モニターに目を移す。

玲香の見つめるモニターには、芳郎の部屋の中が映っていた。この間、お茶に呼ばれたとき。真言と通は二人で芳郎の目を盗み、カメラをしかけたのだと玲香に説明する。玲香は関心したように頷いた。

モニターはダイニングの様子が映っている。芳郎が料理を運び、通が席についている姿が映っている。テーブルの上にはピンクのりボンがついたワインが置かれていた。

玲香と並んで座った真言の耳に、玲香が緊張した息を吐く音が届く。

真言はそつと玲香の横顔に眼をやった。

さあ、この後、どうなるのだろう。

真言は玲香の目に緊張の色を見てとって、ふつと息を吐き出した。どうやら、真言自身も緊張しているらしかった。

+ 第十二章　しかける

カーテンを引いた室内は、照明のおかげで明るい。クーラーがきいてずいぶん涼しくなっていた。

真言と玲香は、とても画質が良いとは言えないモニターをじっと見つめていた。

音声ももちろん入っている。

通達が、しばらくとりとめのない話をしながら、食事をしている風景をただ眺めた。

真言はスーパードで買っておいたおにぎりを食べる。玲香にも食べないかと勧めたが、お腹が空いていないからと断られた。

モニターの中の通と芳郎は、食事を終えていた。芳郎が立ち上がり、画面から一度消え、そしてまた戻ってきた。手には先ほどのピンク色のリボンがついたワインがあった。

『冷えてる方がおいしいからね、さ、どうぞ』

そう言って、芳郎が通の前に置かれたワイングラスにワインを注ぐ。

注ぎ終わったワインの瓶を受取って、今度は通が芳郎のワイングラスにワインを注ぎ始めた。

『ねえ、芳郎さん』

通が芳郎に声をかける。

『あなた、彩香を騙してたわね』

何気なく言われたような言葉に、芳郎が動きを止める。

『何？』

焦りを隠すように、芳郎が不自然な笑顔を見せる。通は、ワインの瓶をテーブルの上に置くと、芳郎を見据えてこう言った。

『あなた、彩香を騙してたのよ。そして、今度は私』

『急にどうしたんだ？　通子さん』

芳郎は今度こそ焦った様子を見せた。

『もう、彩香に何百万も貢がせてたそうね。あなた、クラブで自慢してたんですって？ あなたの同僚から聞いたわ』

通の言葉に、芳郎が顔を顰めたのがモニター越しにも分かった。

『どうやって、彩香に遺言を書かせたの？ 彩香はね、私にこう言ったの。あなたと別れようと思ってるって』

すらすらと通の口から言葉が流れる。どこまでが偽りでどこまでが真実か。それすらも分からなくなるような、饒舌ぶりだった。

『そんなの一時の気の迷いさ。俺は彩香を愛していたし、彩香も俺のこと……』

通は、芳郎の言葉を遮るように、声を上げた。

『嘘よ！ なら、どうして彩香が死んですぐに、私に声をかけたの？ お金が目当てだったからでしょう？』

『違う！』

『違うないわっ』

激しい言い争い。真言は知らず知らずのうちに、唾を飲み込んだ。

『あなたが何人も女性から、お金を貢がせては捨てていること、知ってるのよ。私のことも金蔓としか思ってたのよ！ 嘘つき』

『嘘つきは君の方だろう？ 俺に近づいた目的は何だ』

二人の言い争う声を聞きながら、真言は隣に座る玲香を盗み見る。玲香は真剣な表情でモニターに見入っていた。

そんな玲香の表情が驚きに変わる。その刹那、悲鳴のような声がスピーカーから聞こえた。

慌てて、モニターに目を移した真言の瞳に、ナイフを手にした芳郎とその芳郎に対峙している通の姿が映る。

「嘘だろ」

ちよつと目を離れた隙に何でこんなことになるんだ。

『止めて、ナイフを下ろして』

通が叫ぶ。

『どうしてだよ。皆して俺を馬鹿にして。彩香だって、俺と別れるなんていうからあんなことになるんだ。俺は本当に愛してたのに』
『分かったから、お願い、ナイフを』

通の言葉は、芳郎の咆哮でかき消えた。

芳郎は通に向かって突進する。通が踵を返して逃げ出した。モニターから通と芳郎の姿が消える。真言は腰を浮かしてことの成行きを見守った。

きつと、どこかでこう思っていたのだ。最悪の状況にはならないはずだと。

争うような物音だけがスピーカーから聞こえる。どれくらい続いただろうか。

不意にモニターに通の姿が現れた。通は後ろ向きに歩きながら、よろよるとテーブルにぶつかった。

腹を手で押さえている。その押さえた手の間から赤い色の液体が滴り落ちていた。

「刺されたの？」

震える声で誰かが囁いた。

横を見ると、玲香が真言に顔を向けたところだった。

「嘘だ」

「でも、あれ、血じゃない？」

大きな音が響いた。画面に視線を戻せば、通が倒れた音だということが分かる。

ゆっくりと、芳郎が画面の中に戻ってきた。その手に握られたナイフは赤く染まっている。

嘘だ。

嘘だ、嘘だ、嘘だ。

通さん！

『君が悪いんだよ。嘘ついて俺に近づいて来るから』

芳郎の静かな声が聞こえた。背筋が凍る。

『君が悪いんだ』

真言はすぐるように隣にいる玲香を見た。

そして、目を見張る。

玲香は急に立ち上がった。

「行きましよう。真言くん」

「え？」

呆けたような声を出す真言に、玲香は力強い声で言った。

「通さんを助けないと」

その言葉で我に返り、真言は玲香の背を追うように、部屋を後にした。

+第十三章 依頼人は？

真言は廊下の途中で玲香を追い越し、階段を使って五階に上がった。エレベーターを待っている時間が惜しかったのだ。

芳郎の部屋の号数は知っている。ドアの前に立って、ガンガンとドアを叩いた。

「芳郎さん。芳郎さん、開けてください」

これでもかと言わんばかりに叩き続けると、ガチャリと鍵の開く音が聞こえた。

それと同時に、ドアノブをひねってドアを開けようとする。それが途中で止まった。

見上げれば、芳郎が立っていた。反対側のドアノブを掴んで、ドアがこれ以上開くのを止めている。

「中に入れてください」

真言が言つと、芳郎が首を横に振った。

「通さん、通さ……」

声を張り上げると、慌てたように芳郎が真言の口を大きな手で塞いだ。そのまま、無理やり真言を部屋に引き入れる。

「騒ぐな」

低い声が背中越しに伝わった。真言は今、背後から腕をまわされ、口をふさがれた格好だ。

そのまま、真言は一度来たことのあるダイニングルームまで連れてこられた。倒れた通の姿が目に入り、声を上げる。だが、芳郎に口を塞がれたままだったので、くぐもった声しかでない。

その背後で、勢いよくドアの開く音が聞こえた。

「真言くんっ」

玲香の声だ。息を切らせているところを見ると、どうやら玲香も階段を使って走って来たらしい。

「あんたは……」

驚きの声が芳郎の口から洩れた。

「真言くんを離して！」

牽制するように、玲香は強い口調でそう言った。

「何であんたがここに」

愕然と呟くような芳郎の声。

「私が頼んだのよ。姉さんを裏切ったあんたが許せなくて、よくも姉さんを殺したわね」

芳郎の表情が剣呑なものへと変わる。

「よしてくれ、どうして俺が彩香を殺さなきゃならないんだ」

「さっき言ってたじゃない。俺に別れるなんて言うからあんなことになるんだって」

声を張り上げる玲香に、芳郎は首を大きく振った。

一瞬の隙を見逃さず、真言は芳郎の腕から逃れて、倒れている通の下へ駆け寄った。

膝について、通に触れる。

真言は息を飲んだ。

「ねえ、救急車」

真言は叫ぶが、玲香の耳にも芳郎の耳にも入ってはいないようだった。

「違う。違う、そうじゃない。俺は彩香を殺してない」

「嘘よ。あなた、あの人を刺したじゃない。あの人みたいに、姉さんも殺したんだわ」

その言葉に、芳郎は一步退いた。テーブルにぶつかり、芳郎はテーブルに手をついた。

片手で頭をかきむしり、テーブルの上に残っていたワインの入ったグラスを掴む。気分を落ちつけようとするかのように、それを口に運んだ。

一口、二口飲んですぐ、芳郎はワイングラスを落とした。ワイングラスが床にあたり、破片と液体が四散する。

芳郎は口元に手をやり、うめき声をあげた。

「よ、芳郎さん？」

真言の呼びかけも聞こえていないのか、芳郎は床に倒れ、喉を掻きむしりながらのたうちまわる。

そして、動かなくなつた。

奇妙な静寂が辺りを包む。

「芳郎さん」

真言はもう一度呟いた。芳郎の方へ、這うように近づき芳郎の顔を見る。

芳郎は目を見開いていた。彼の口元からは血が流れている。

「し、死んでる」

真言は口元に手をやった。

不意に、玲香の笑い声が真言の耳に届いた。

「自殺……、自殺したのね。どうしようもなくなつて、自殺したのよ。やっぱり、この人が犯人だった。姉さんを殺したのは、やっぱりこの男だった」

玲香はまた、笑った。

真言は怯えたようにそんな玲香をただ見つめ続けた。

+ 第十四章 復讐の終り

通と芳郎が倒れた部屋で、玲香は笑い続けていた。

真言は玲香を睨んだ。

それに、玲香は気づかずに笑っている。

真言は立ち上がった。やるせない気持ちでいっぱいだった。

「どうしてですか？ 玲香さん。どうして、殺したんですか」

玲香の笑い声がやんだ。

冷たい視線が真言を射る。

「殺した？ 私が？ 言いがかりはよして頂戴、この人は、自殺よ」

真言は一度目を伏せた。

「言いがかりじゃないよ。あなたが殺した。僕は知ってる」

「何を言ってるのか分からないわ。ああ、そうね。二人も人が死ん

だんだもの、気がふれて当然よね」

可哀想にと同情するような表情をつくる玲香。そんな玲香に、真

言は言った。

「馬鹿だね、言うとおりに泳ぎの練習していれば、こんなところで溺れずにすんだのに」

真言はゆっくりとそのセリフを口にした。

玲香の表情が変わる。否、玲香の顔から表情が消えた。

「彩香さんは、あなたに助けてっていったのに、あなたは見殺しにしたんだ」

玲香が動いた。真言に向かって。

「あなたが、殺したんだ。お酒の弱い彩香さんに大量のお酒を飲ませて、湖に突き落した。彩香さんを殺したのはあなただ。僕は見た」

そう、玲香と初めて会った日。真言は玲香の目を通して、一部始終を見ていた。

暗い森の中。月明かりに浮かぶ湖。大きな水音。
助けを求める声。

「どうして、どういうことなの」

玲香は真言の肩を掴んで揺さぶった。

「なぜ知ってるの」

その声とともに、突き飛ばされて、真言は床に尻もちをつく。

ふと、玲香が笑みを浮かべた。玲香の視線を追うと、床に落ちたそれに真言も気づく。真言が動くよりも早く、玲香はそれを拾い上げた。

「茉莉さんたちがいなくてよかった。あなたも……」

玲香はそこで一旦言葉を切って、倒れている芳郎を見た。

「彼に殺されたの」

芳郎が通を刺したナイフを持って、玲香は微笑んだ。

真言は、身を震わせる。

「そんな、ここはカメラがある。みんな映ってるんだ」

「そうね。でも、そんなの壊せばいいわ」
怖かった。

ものすごく。

玲香が怖かった。

「計算が狂ったけど、まあいいわ。姉さんの遺産が入れば何でもいい」

玲香が真言を見下ろし、ナイフを振り上げた。

真言は反射的に目をつぶって、痛みを予想して身構える。

しかし、予想した痛みは一向にやってこない。

恐る恐る目を開くと、玲香が誰かに背後から腕をとられていた。

「せ、清吾さん。姉さん」

叫んだ後、ほっと力が抜けるのを感じる。

「な、何、離して」

「まあ、まあ。暴れなさんなっ。新犯人さん」

清吾が人を食ったような物言いをする。

「真言、よく頑張ったわね」

茉莉が玲香と清吾の横をすりぬけて、真言に手を差し出した。

情けないが、すぐるようにその手を取って立ち上がる。

「離してつたら、私が何をしたって言うのよ」

玲香が怒鳴る声が部屋に響く。

「よく言うよ。何したかつて？　ワインに毒を盛ったくせに」

その声は、清吾の口から洩れたたわけでもなく、茉莉でも、ましてや真言でもなかった。

「嘘っ」

そう声を出した後、玲香は絶句した。

玲香の目に映っていたのは、声を出した人物の姿。

目を大きく見開き絶命したはずの人物だった。

口元から垂れた血を拭って半身を起したのは、芳郎だった。

「よ、芳郎さん」

真言は、芳郎に駆け寄った。芳郎はにっこりと笑顔を作り、真言の手を借りて長身を起こした。

「びっくりしたよ。本当に死んじやったかと思った」

「悪い悪い」

言いながら、芳郎は真言の頭をなでる。

「あなた、死んだはずじゃ……」

芳郎を凝視し、驚愕する玲香に、茉莉が艶やかな笑顔を向ける。

「そう、あなたが持ってきた毒入りのワインでね」

清吾が掴んでいた玲香の腕を離して、部屋を出た後、何かを手にして戻ってきた。

「あんたが持ってきたのは机の上にあるワインじゃなくて、こっちのワインだったけどな」

清吾が玲香にワインの瓶を見せた。

「すり替えておいたんだよ。俺もワインの買い出しに行ってたんだ。昨日こっちがあんたに、酒買いに付きあえって電話したあと、あんたが買って来たワインを調べてね。予備のためかしんないけど、あんな三つも買うんだもんなあ。金もつたいねえつつうの」

清吾が言う。茉莉は頷いて玲香に目をやった。

「このワイン調べれば、あなたがしようとしていたことが全て分かるわよ。あなたは芳郎を殺そうとしたわね」

「ネットで薬物買っただろう。ちゃんと調べついてるぜ」

口添えする清吾。

「自殺にでも見せかけようとしたか？ さっきあんたが言ったように」

玲香は大きく首を横に振った。額に手をやって、前髪を掴む。

「どうなってるの。何が、どうして……」

茫然自失したように、玲香は声を洩らす。

「通」。いい加減に起きたら？」

茉莉が背後で倒れたままだった、通に声をかけた。

真言が通に目をやると、通はゆっくりと起きあがるところだった。服の腹の部分は真赤に染まっているが、いたって元気そうだ。

通はうーんと伸びをしてから、立ち上がる。

「あー。じつと倒れてるのも疲れるし、飽きた」

「あなたまで、死んだはずじゃ……刺されてたじゃないの」

玲香が叫ぶ。

通は得意げに笑んだ。

「迫真の演技だったでしょう。僕も、芳郎も」

玲香は息を飲む。

「あなたたち、皆グルだったの？ 私を騙してたのね。あの、手紙も。私を人殺しって書いた手紙も、あなたたちが送ってきたのね」

玲香は動いた。テーブルの上にあったワインの瓶を掴むと、それを大きく振り上げて真言に向かう。

殴られる。

真言は咄嗟に頭を手で庇った。

「おおっと、危ねーな。お前、ちったあ大人しくしろっつーの」

その声に顔を上げて見ると、清吾がまた玲香の腕を掴んでいた。

玲香は必至に清吾の腕から逃れようとしていたが、所詮、男性の力にはかなわない。茉莉が冷笑する。

「騙していたのはお互いさまでしょう」

「私は依頼人なのにつ」

玲香は茉莉を睨む。

憤怒の形相とはまさにこのことなのだろうかと言言は思う。玲香の綺麗な顔は今、醜悪に歪んでいた。

「残念ながら、あなたは依頼人ではないわ。私たちの依頼人は別にいる」

きっぱりと茉莉はそう告げた。

「あなたも会ったはずよ。彩香さんの婚約者。彼が私たちの依頼人」
玲香は顔をあげて、清吾に掴まれていない自由な方の腕を持ち上げた。そして、芳郎を指差す。

「それはこの人でしょう、婚約者はこの人だって弁護士が言ったわ」
芳郎は、悠然とそれを受け止めた。余裕のある笑顔で真実を口にする。

「俺は、彩香さんの婚約者ではないよ。遺言発表の場に、もう一人いただろう。あんたたちが勝手に勘違いしたんだ。俺ではなく、もう一人が、本物の婚約者だ」

玲香はその時のことを思い浮かべたのか、力なく声を上げた。

「そんな」

「本当は、遺言なんてなかったんだよ。あの弁護士は俺達が仕込んだ偽物だったってわけだ。気づかなかった？俺のプロフィール。クラブ経営していて、今破産寸前。ほら、まんまアンタのことだろう」

「そんな。……嘘よ。嘘、そんなの嘘だわ」

「あんたここ数カ月、姉の会社に脅迫文を送っていたらしいな」

「彩香さんはそれに気づいていたわ。誰がやったのかも。そして、悩んでた」

玲香は首を振りながら嘘だと呟き続けている。

「嘘じゃない、これが現実だよ。玲香さん」

通が、悲しそうに玲香を見つめていた。

「あなたのお姉さまは、私の客だったの」

茉莉が不意に口を開いた。玲香がゆっくりと茉莉に視線を送る。

「私は占い師。彼女を視た時、彼女の行く末には暗雲が立ち込めていた。未来が視えなかったの」

玲香は口を横に引いた。歪な笑顔になった。

「すこしでも暗い未来を回避できるように、私は助言したわ。今すぐ家族と縁を切りなさいと。できないなら私たちが力になると。でも、彩香さんは聞かなかった。きっと大丈夫、私は信じているって。彩香さんはあなたが思いとどまってくれることを信じていたのよ」

その言葉を聞いて、玲香は急に笑い出した。気味の悪いものを見るような眼で、清吾が玲香を見やる。

「あははは。ふざけてるわ。本当に、ふざけてる。姉が私を信じていたですって？ そんなことあるわけじゃないじゃない。あの人は私のことなんて気にも留めてやしなかったわ。姉だけじゃない。あの家の誰も、私に興味なんてなかった」

玲香はそこで息をついた。

「私がどんなにお願いしても、助けてくれなかったのに。好い気味よ。結局私に勝てなかったんだわ。最後は私が勝った。勝ったのよ。半狂乱になったように、玲香は笑い続ける。

真言は一度目を伏せてから、顔を上げた。笑い続ける玲香を見据え、口を開いた。

「勝ったっていうなら、どうしてそんなに悲しい眼をしているの？」

「何？」

笑うのをやめ、玲香は真言を凝視する。

「あなたの今の目の色は、悲しい色。後悔の色だ」

真言の言葉に、息を詰まらせて、玲香は俯いた。ゆっくりと膝をおり、床に座り込む。清吾がその動きに合わせて掴んでいた玲香の腕を離した。

「お金が必要だったの。お金が。両親の愛情も、会社もすべて独り占めにしてきたくせに、あんなに必至で頼んだのに……これは、罰

よ、何もかも私から奪った姉さんへの、罰なのよ」

玲香は一度息を吐き出すと、茉莉に顔を向けた。

「ねえ、私はどうなるの？」

「私たちは警察じゃないわ。自首するも、逃げるも好きにして。私たちの目的はあなたから告白を引き出すことだから。この模様はしっかり録画させてもらってるし、クライアントには報告できる材料はそろったもの。ただし、私たちに何かしたら、すべて警察に話す」茉莉は淡々とそう口にした。玲香はほんの少し口の端をあげた。

「そう」

小さくつぶやいて、うつむいた。

それを全員で見やる。しかし、玲香に声をかける者はなかった。

+ エピローグ

「なーんか後味の悪い事件だったね」

通が思い出したように、そう言った。事務所の自分の席に座って仕事をしていた真言は、顔をあげて通を見やる。

「ですね。でも、皆ひどいですよ。毒のこと、僕に教えてくれないなんて」

「まーだ言ってんのか。根に持つタイプはやだねー」

清吾は珍しく、パソコンに目をやりながら声を上げる。

「いいですよ、別に。どうせ僕は根に持つタイプですよ」

「あはは、マコちゃん認めちゃった」

「ほんとにな。おっと、王手かよ」

通の隣の席で、清吾が声を上げた。どうやらパソコンで仕事しているのではなく、またゲームをしているらしい。

真言は立ち上がって清吾のノートパソコンを閉めてやった。

「ああ、何すんだ真言、手挟むだろ。手！」

「あはは。マコちゃん偉い」

通が拍手してくれる。

「何が偉いだ。もう少して終わるところだったに」

「仕事中に遊ばないでください」

真言は腰に手をあてて清吾を睨んだ。

そんな真言の隣の席から、声上がる。

「真言君の言う通りだぞ清吾。それに負けてたんだろっ将棋。いいじゃないか」

その声に顔を向けた真言は眉を寄せたまま、その相手に言った。

「芳郎さんもです。何でいつもそんなふざけた格好してるんですか。せつかくかつこいいのに。そのセリフは胸の中だけで言っておく。」

真言の目に映る芳郎は、ウサギのパジャマを着ていた。ご丁寧な耳のついたフード付きのものである。しかも、色はピンクだ。百八

十近い身長の男が着るものではないだろう。しかもサイズはピッタリ。いったいどこで買ってくるのだろうか。

「いいじゃないか。可愛いんだから」

無類のかわいいものの好きである芳郎は、そんな風に文句を言った。芳郎の机の上には、可愛いぬいぐるみや、ファンシーグッズが置いてある。今使っているボールペンにはハートのストラップがついていた。

「仕事しにくいでしょう。依頼人が来たらどうするんです」

「隠れるんだよね。芳郎」

通がフォローするように言ったが、ちっともフォローになっていなかった。

清吾は、言われてやんのと笑い転げている。

「清吾さんも笑ってないで仕事してくださいっ」

真言がそう叫んだときだった。

隣室のドアが開き、茉莉が顔を出した。

「真言、何騒いでるの？」

不思議そうな顔をしている茉莉に、真言はだつてと口をもぐもぐさせた。

「姉さん、何でこんなメンバーばかり集めたの？」

思い切って聞いてみた。

茉莉は驚いたような顔になり、一同を見回した。

「あら、言ってなかったっけ？」

「マコプー、こんなって言い方くない？」

通が苦笑の色を浮かべて、真言を見る。

「通さんも、どうして僕だけへんなあだ名つけるんですか？ みんなは普通に呼んでるのに」

抗議するように言うと、清吾が声を上げた。

「俺らも変なあだ名つけられてたよな、芳郎」

「ああ、俺は何だっけ、ヨシヨシとか？ ヨシくん、ヨッシーとか。あと、よっちゃんの後はい力だったっけ。中学の頃ブームだったよ

な。通の」

そう、芳郎が言えば、茉莉も思い出したと手を打った。

「そうそう。私はマリーアントワネット」

「それは、お前が無理やり呼ばせてたんだろうが」

茉莉の発言に、清吾が突っ込みを入れる。

「ちょ、ちょっと待って。中学の時って、みんな中学の頃からの知り合い？」

茉莉の顔を見て聞くと、茉莉は大きく頷いた。

「そうそう。中高と同じ学校でね。全員演劇部に所属してたのよ」

そんなの知らなかった。茉莉が中学生の頃は、真言はまだ幼稚園にも通っていないし、聞いていても覚えてはいなかっただろう。

「皆のあだ名つけるのは、飽きちゃったから、最近は普通に呼んでるんだよ」

通が先ほどの真言の問いに答えるように言う。真言は大きく肩を落とした。

「そう、だったんですか」

「そうそう。そのうち、真言の呼び名も落ち着くって。どうせ、通はすぐ飽きるから」

清吾が、真言にそう声をかけた。

「さ、皆。それより仕事よ」

切り替えるように、茉莉が声を上げた。通がそれに反応する。

「どっちの？」

そう聞いた通の眼が、どこか輝いているように見えるのは、真言の気のせいだろうか。

「もちろん＋プラス探偵事務所の方よ」

茉莉はそう言って鮮やかな笑みを浮かべた。

「さあ、みんな忙しくなるわよ」

「了解」

茉莉の声に四人一斉に声をあげた。

キャラクター原案&あとがき

キャラクター原案は高田高さまよりいただきました。
いただいた原案をそのまんまコピペさせていただきます。

シャッフル企画用キャラクター原案

・田上 清吾

(たがみ せいご)

・男

・短めの茶髪、顎ヒゲ、四角^{タテ}眼鏡、長身(180程)

長所・動物に好かれ易い

短所・何事にも不真面目

特技・鉄の胃袋(胃が強く、少し腐っているくらいなら問題無い)

・佐野 通

(さの とおる)

・男

・肩に掛かるセミロングを後ろで束ねている、女性顔、背が低い(160程)

長所・誰にでも優しい

短所・飽き性

特技・女装(女装行為自体は本人の意思を無視されており、彼自身は相当嫌がつている)

その他詳細、人物関係、特技を作品内で扱うか等はお任せします。

あとがき

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。
これから先は、とりとめなく書いていきます。

いかがでしたでしょうか。いただいたキャラクター。

ご想像とあっていましたか？ それとも違っていましたか？
私の予想では、大体の方が正解しているのではないかと思ってます。

正解は清吾と通でした。他はすべて私が考えたキャラクターです。

キャラクターを考える際に、ちょっと書いた設定がこれです。

主人公

真言 まこと（16）

気の弱い少年。可愛がりたくなるタイプ。

所長

宇佐見 茉莉

気が強く、はきはきした女性。真言の姉。

これだけです。たいてい、あまりきつちり最初に考えません。芳郎にいたっては書きだしもしていません。と、いうか普段はあまり書きだしません。頭の中で考えていきます。と、これは余談でした。

さて、高田さまよりキャラクター原案をいただいたとき、これは主人公にするのはもったいないなと思いました。特技が面白いじゃないですか。鉄の胃袋と女装ですよ。作品内で扱うかはお任せしますと、高田さまは書いてくださいましたが、これは絶対入れようと思いました。

で、主人公にするよりも、はたから見てもこの人たちなんなの？！と驚くような人がいた方がいいと思いますそれを主人公の役割にしました。

実際のところ、驚くより、お小言というキャラになっちゃいましたが、通の誰にでも優しいところがちゃんと出せなかったのが心残りですね。

清吾の何事にも不真面目な点を、不真面目と書かずに不真面目に見えるように書くとうと頑張りましたが、どうでしょう。伝わりましたでしょうか。これは通の飽き性も一緒です。

ストーリーは、通に女装させるには、どういう状況にすればいいから考えました。通の特技が女装でなければこの話は生まれなかったと思います。

お話のラスト。

玲香があのだとうなつたか書いてません。これは、皆様のご想像にお任せしたいと思います。

それでは、長い間お付き合いいただきありがとうございました。

また、お会いできることを願って。

愛田美月でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3339h/>

+ プラス探偵事務所

2010年10月8日15時29分発行